櫛形町文化財調査報告　No－16

町内遺跡試掘調査報告Ⅱ

―ケア・ハウス建設に伴う藤塚遺跡試掘調査他―

1997

櫛形町教育委員会

序　　文

櫛形町は甲府盆地の西縁に位置し、櫛形山の東麓に発達した町であります。甲府盆地の西縁、釜無川より西方一帯は峡西地方とよばれてきましたが、櫛形町は古来からその中心として栄えてきました。国の重要文化財に指定された優秀な土偶を出土した鋳物師屋遺跡をはじめ古代からの遺跡も多く、また甲斐源氏の一族小笠原氏発祥の地としても知られています。

近年は、甲西バイパスの建設などに伴う開発の流れがおしよせ、町としても平成２年に策定された『第３次櫛形町総合計画』のもと「美しい自然、美しい街なみ、美しい心」の町づくりをめざしさまざまな施策を実施しております。櫛形町教育委員会では、それらの諸事業に先だって、国・県の補助をいただきつつ埋蔵文化財の保護をはかるため調査事業を実施してまいりました。

今年度におきましても、本書に報告しましたように数ヶ所の調査を行い、多くの成果をあげることができました。この成果が地域の歴史を時代に伝える意義ある資料として活用していただければ幸いです。

最後になりましたが、今回の調査に種々ご協力・ご指導賜った皆様に心から感謝申し上げる次第です。

平成９年３月

櫛形町教育委員会

教育長　野　中　藤　雄

例　　言

1、本書は、平成８年度におこなった櫛形町内埋蔵文化財－藤塚遺跡他－調査報告である。

2、本調査は、平成８年度文化財保存事業として、櫛形町教育委員会が文化庁・山梨県の補助を受けて実施した。

3、調査の対象となった遺跡は下記のとおりである。

赤面Ｃ遺跡　　山梨県中巨摩郡櫛形町沢登字七ツ内５８３－１他

藤塚遺跡　　山梨県中巨摩郡櫛形町小笠原藤塚１０８７－１

枇杷Ｂ遺跡　　山梨県中巨摩郡櫛形町小笠原字枇杷１８３１－１他

4、本報告書の編集は清水がおこなった。なお報告書作成にかかる業務分担は下記のとおりである。

第Ⅰ～Ⅲ章　　清　水

遺物の実測・トレース　　若　林・神　田

写真撮影　　清　水

附章は川鉄テクノリサーチ株式会社岡原・伊藤両氏の報文を清水が要約したものである。

5、調査にあたった組織は以下の通りである。

調査主体者　　櫛形町教育委員会

教育長　野中藤雄

調査担当者　　清水　博　（櫛形町教育委員会　文化財主事）

補助調査員　　若林初美

事　務　局　　櫛形町教育委員会文化財係

調査参加者　　相川春美・桜田和子・桜田定子・桜田みさえ・由井伴三・神田久美子・饗場うさ乃・川崎しげ美・長沼豊子

6、発掘調査及び本報告書の作成にあたって、下記の諸氏諸機関からご指導、ご協力をたまわった。記して謝意を表する次第である。

出月洋文・中山誠二（山梨県教育委員会芸術文化課）、保坂康夫・米田明訓・森原明廣（山梨県埋蔵文化財センター）、田中大輔（若草町教育委員事）、山梨県教育委員会学術文化課、若草町教育委員会、

7、本調査によってえられた出土遺物、図面並びに写真等の諸記録は櫛形町教育委員会において保管している。

凡　　例

1、本書使用地図は、国土地理院発行の小笠原１／２５０００地形図である。

1、遺構実測図等現場において作成した図面はすべて国家座標第Ⅷ系によっている。

1、遺構実測図中のスクリーン・トーン等の表示は次の通りである。

方位は磁北による。水糸レベルは海抜高を示す。

遺物は大数字で遺物番号を、小数字で床面からのレベルを示す。

スクリーン・トーンの表現は図中に示してある。

1、遺物実測図中のスクリーン・トーンの表示は次の通りである。

断面図中のスクリーン・トーンは磁器を示す。

目　　次

序　　文
例　　言
凡　　例
目　　次
第Ⅰ章　遺跡を巡る環境 …… 1
　第1節　地理的環境 …… 1
　第2節　歴史的環境 …… 3
第Ⅱ章　遺跡各節 …… 4
　第1節　町道11号線建設に伴う赤面C遺跡調査 …… 4
　第2節　ケア・ハウス建設に伴う藤塚遺跡試掘調査 …… 10
　第3節　工場移転に伴う枇杷B遺跡試掘調査 …… 12
第Ⅲ章　まとめ …… 14
引用・参考文献 …… 14
附　　章　山梨県櫛形町赤面C遺跡出土の鉄製品等の分析・調査 …… 15
報告書抄録

挿図目次

第1図　遺跡位置図及び周辺遺跡分布図〔1/25000〕 …… 2
第2図　赤面C遺跡周辺地形図〔1/5000〕 …… 4
第3図　赤面C遺跡調査位置図及び遺構配置図〔1/800・1/120〕 …… 6
第4図　赤面C遺跡1号竪穴住居址・同炉〔1/60・1/30〕 …… 7
第5図　赤面C遺跡出土遺物〔1/3〕 …… 8
第6図　藤塚遺跡周辺地形図〔1/5000〕 …… 10
第7図　藤塚遺跡トレンチ配置図及び土層セクション図〔1/1500・1/600・1/120〕 …… 11
第8図　藤塚遺跡出土遺物〔1/3〕 …… 11
第9図　枇杷B遺跡周辺地形図〔1/5000〕 …… 12
第10図　工場移転用地内試掘トレンチ配置図〔1/1000・1/100〕 …… 13

表目次

第1表　赤面C遺跡出土遺物観察表 …… 9
第2表　藤塚遺跡出土遺物観察表 …… 12

写真図版目次

Ⅰ－1　赤面C遺跡全景（西方向より）
Ⅰ－2　同　（東方向より）
Ⅰ－3　赤面C遺跡1号住居址全景
Ⅰ－4　同　炉
Ⅰ－5　同　遺物出土状況
Ⅰ－6　赤面C遺跡1号溝状遺構及び鉄製品出土位置
Ⅰ－7　赤面C遺跡鉄製品出土状況
Ⅱ－1　枇杷B遺跡第1トレンチ
Ⅱ－2　同　第2トレンチ
Ⅱ－3　枇杷B遺跡第2トレンチ東端落込み
Ⅱ－4　枇杷B遺跡第1トレンチ焼土溜まり
Ⅱ－5　同　中央落込み
Ⅱ－6　藤塚遺跡全景（北東より）
Ⅱ－7　同　第1トレンチ
Ⅱ－8　藤塚遺跡第1トレンチ土層セクション
Ⅱ－9　同　第2トレンチ東端部
Ⅲ－1～5　赤面C遺跡1号住居址出土土器
Ⅲ－6　赤面C遺跡遺構確認面出土土器
Ⅲ－7　鉄製品外観写真
Ⅲ－8　鉄製品X線透過写真
Ⅲ－9　鉄製品切断状況写真
Ⅲ－10　鉄製品切断（試料部分写真）
Ⅲ－11　鉄製品顕微鏡写真（L方向×20）
Ⅳ－1　鉄製品顕微鏡組織写真（L方向×400）
Ⅳ－2　同　（エッチング処理後L方向×400）
Ⅳ－3　走査顕微鏡写真（L方向×400）
Ⅳ－4　ＥＰＭＡ観察写真（Fe×400）
Ⅳ－5　同　（Si×400）
Ⅳ－6　同　（Ca×400）
Ⅳ－7　同　（Mg×400）
Ⅳ－8　同　（Al×400）

第Ⅰ章　遺跡を巡る環境

第１節　地理的環境

櫛形町は、山梨県の西部中央に位置し、山梨県元票（山梨県庁）からは約14kmの距離を隔てている。地元では、甲府盆地西部を北から南へ緩い弧状を呈して貫流している釜無川以西の地域を峡西地方と呼んでいるが、櫛形町は峡西地方の中央に位置している。

山梨県はその西限を南アルプスと呼ばれる赤石山脈によって画し長野県と接しているその前方にはやや高度をおとし巨摩山地が南北に連なっている。この巨摩山地の主峰は、大きく櫛の形をとって聳える櫛形山であるが、櫛形町はこの山裾に発達した町で、町名も櫛形山に由来している。

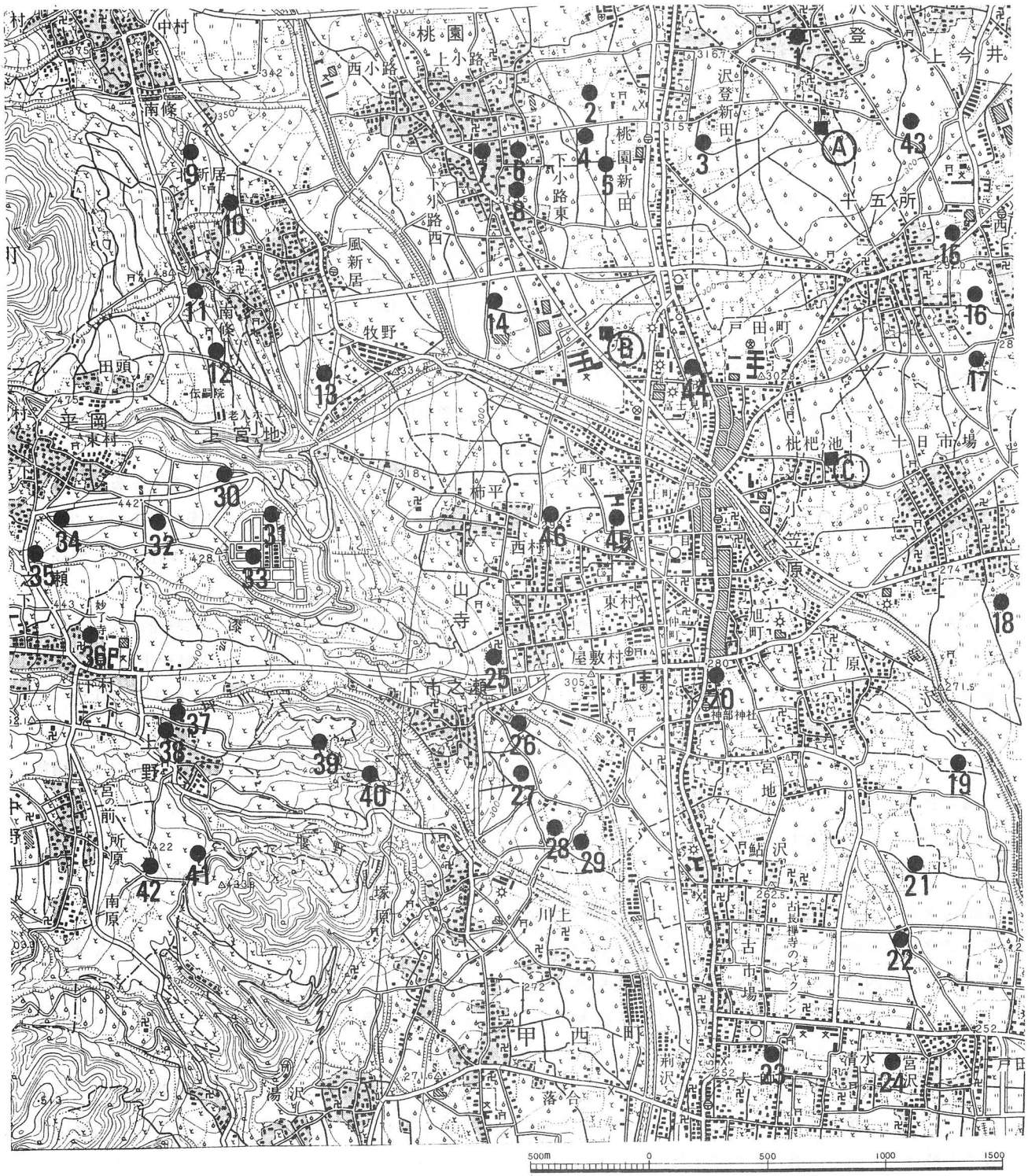
櫛形町は地誌的、地形的に大きく三様に区分されそれぞれ極めて対照的な特徴を示している。町内西半部では櫛形山が大きな山容を誇り、中央部はその東麓に発達した市之瀬台地が占めている。東半部は櫛形山から流れ出た諸河川が造りだした扇状地となり釜無川の造る沖積地へと続いている。

櫛形山を主座とする巨摩山地やその背後に連なる赤石山脈は、糸魚川一静岡構造線の一部をなし、櫛形山腹には幾条かの断層崖地形が刻まれている。櫛形山の中腹に連なる高尾・立沼・伊奈ヶ湖・泊平等の平担面や沼地は伊奈ヶ湖断層によって生じた窪地を成因とするものである。また、櫛形山裾には上市之瀬断層が存在し、標高500m程にみられる傾斜変更線を経て市之瀬台地に続いている。

櫛形山の東麓の拡がる市之瀬台地は、上市之瀬断層前面に発達した更新世扇状地が甲府盆地形成に与った最も新しい地殻変動によって形成された丘陵状の地形である。この台地は南北４km、東西2,5kmの扇形平面を呈し、標高は400～500m を示している。台地前面は比高差100～200m を有する下市之瀬断層崖を経て盆地床の扇状地へと至る。台地先端は、断層運動に伴って発達した小円頂丘がならび、この西側はなだらかな逆傾斜面を経て西方山麓へ向かって順次高まっていく。台地基盤は櫛形山塊に由来する古い扇状地堆積物で、その上部は火山性堆積物で覆われ、上位から新期信州ロームに対比される伝嗣院ローム、古御岳に由来する黄白色軽石層（Ｐｍ－１）、中期信州ロームに相当する上野山ロームの順となっている。

この市之瀬台地上面には、北から高室川・深沢川・漆川・市之瀬川・秋山川等が流れ侵食地形を刻んでいる。櫛形山を水源とするそれらの諸河川は、上流山地では18～22°という急激な勾配をもって流れ下り、盆地床に達すると急激に流れを弱め、みずから削り流した大量の土砂を堆積させて谷の出口から扇状地を造る。ところで櫛形町が所在する峡西地方には、南アルプスから流れ出した御勅使川の造った大扇状地がある。この扇状地は幅10km長さ７km以上に及び峡西地方の北半分を占める広大なものであるが、その南端部では櫛形山から流れ出した諸河川の造った小扇状地と相まって複雑な「複合扇状地」をなしている。これらの扇状地にあたるこの一帯は、ところによっては１～２ｍにも及ぶ厚い扇状地堆積物に覆われた、極めて地下水位が低く水に乏しい乾燥地で、かつ豪雨時には洪水に襲われる水田経営に不適な地勢である。この地域は古来から「原七郷」と呼ばれ、「原七郷は月夜でも焼ける」といい慣わされてきた。

扇頂部で地下に滲みこんだ水は扇端部で再び湧き出して、若草町の鏡中条・十日市場、甲西町の江原・鮎沢等と弧状に連なる湧水列をなしている。この湧水列から低位は水の豊富な一帯となり、釜無川の形成する氾濫原へと続いている。この氾濫原は「田方」と呼ばれ、水田経営を主体としてきた地域である。一方水に乏しい扇央部は乾燥地帯で、「原方」といわれ江戸時代は木綿やタバコの栽培によって生計をたててきたところで、明治以降は桑畑や果樹園に利用されてきた。また、台地から扇頂部にかけては「根方」と呼ばれ、山の根にあって、谷川の水を利用した水田や台地上の畑にたよってきた。このように地域の自然環境の特質は、それぞれの地域の生活・文化等と有機的な関係を示し、まさに地誌的な特徴を顕している。



A. 赤面C　B. 藤　塚　C. 枇杷B　1. 永面B　2. 宮　原　3. 鼠　作　4. 東畑A　5. 東畑C
6. 東畑E　7. 東畑F　8. 大新井G　9. 神明B　10. 神明A　11. 無名墳　12. 御崎神社横　13. 曽　根
14. 西　原　15. 十五所　16. 吉田西原D　17. 村前東A　18. 二本柳　19. 白河東　20. 下宮地　21. 油　田
22. 中川田　23. 住　吉　24. 大師東丹保　25. 宝珠寺西　26. 狐塚古墳　27. 鋳物師屋古墳　28. 鋳物師屋　29. メ　木
30. 東原B　31. 六科丘古墳　32. 長田口　33. 六科丘　34. 中　畑　35. 久保田A　36. 石原田　37. 上の山
38. 椿　城　39. 上ノ東　40. 物見塚古墳　41. 東久保A　42. 古屋敷　43. 吉田西原A　44. 八田畑B　45. (伝)小笠原氏館
46. 若　宮

第1図　遺跡位置図及び周辺遺跡分布図〔1／25,000〕

第２節　歴史的環境

釜無川の右岸、櫛形山の山裾に発展した櫛形町は、西半部を櫛形山とその東麓に形成された市之瀬台地が占め、東半部は盆地床縁辺の扇状地となっている。すなわち地形的に大きく山地・台地・扇状地に分類され、そのため地誌的にも極めて対照的な様相を示していることは前節において述べたところである。

平成元年度に実施された町内遺跡詳細分布調査によれば、町内には239ヶ所の埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が確認されていたが、遺跡の数はその後の確認も加え現在では260ヶ所にのぼっている。遺跡は主要には台地上に認められているが、櫛形山中の断層によって生じた平担面にも縄文時代を中心とする遺跡がわずかながら確認されている。また、最近の甲西バイパスに伴う事前調査等によって、従来「田方」と呼ばれてきた厚い堆積土に覆われた沖積地においても多くの遺跡が確認されつつある。さらに近世以降の遺跡が主体をなすと考えられてきき扇状地上においても、厚い砂礫層の下から弥生時代中期にまで遡る遺跡が発見され、調査が実施されている。

町内において最も古い遺物は旧石器時代に由来するもので、市之瀬台地上から数ヵ所にわたって（長田口遺跡・六科丘遺跡）この時代にさかのぼる遺物が発見され、県内でも古い時代から人々の生活の場であったことを物語っている。

この台地上では以来、縄文時代・弥生時代を通じて遺跡が営まれており、特に縄文時代中期（長田口遺跡・東原Ｂ遺跡・中畑遺跡・上の山遺跡・東久保Ａ遺跡・古屋敷遺跡）、弥生時代終末（六科丘遺跡・長田口遺跡・上の山遺跡）等の良好な遺跡が点在する地域である。この台地の先端部の小円頂丘上にはまた、幾つかの前期古墳（物見塚古墳・六科丘古墳）が連続して築造され、この時代の地域的中心であったことを示している。

一方台地下の扇状地では、台地裾部を中心に縄文時代・弥生時代の遺跡（曾根遺跡・鋳物師屋遺跡）等が確認され、鋳物師屋遺跡からは重要文化財に指定された良好な資料が出土している。扇状地における一般的な遺跡のあり方は、平安時代以降遺跡が進出する事を示している。古墳時代の遺跡は台地の裾部（曾根遺跡）や扇端部の湧水列に沿って認められる程度であるが、平安時代になると町内全域に遺跡が営まれ、台地上にも再び進出する。近世の遺物は現在の集落とほぼ重なる分布状態を見せ、現在の集落の成立時期を暗示している。しかし、前述したように最近の甲西バイパスに伴う調査によって、沖積地や扇状地の厚い堆積層の下部から方形周溝墓（十五所遺跡）や弥生期の水田跡、古墳時代前半代の大集落跡（村前東遺跡）等が確認され、甲西町東丹保遺跡からは前期古墳も発見されている。このことは、当該地に於ける歴史の見直しを迫るものであり、また従来遺跡の存在を確認しえなかった扇状地内に於ける開発行為に対しても注意を喚起するものとなった。

ところで、律令体制下では、本町南半部から甲西町・増穂町にかけては『和名類聚抄』に甲斐国・巨摩郡九郷の一つとして記載されている「大井郷」に比定されている。また、町内北半部から御勅使川扇状地にかけては、平安時代から鎌倉時代にかけて「八田御牧」の一部であったと考えられている。律令体制の崩壊後、甲斐国では甲斐源氏の一族が強大な勢力を持つに至るが、本町一帯は小笠原〔櫛形町〕、加賀美〔若草町〕、秋山〔甲西町〕等の地名が示すようにその一族が居館を定めた地である。小笠原小学校付近は小笠原氏の祖、小笠原長清の館跡と伝えられ、上野の台地上には同氏の一族上野氏や、戦国時代に武田大井氏が拠った椿城が僅かに痕跡を止めている。町内にはその時代の山城（中野城・笹砦）や石造物が各所に残され、中世以来の伝統や文化を伝える社寺が多く現存している。江戸時代になると、西郡の中心、駿信往還の要所として発展するがその姿は『村明細帳』や『甲斐国志』にうかがうことができる。近代にはいり、明治４年（1871）山梨県が成立して以降、幾多の曲折を経て最終的には昭和29年（1954）小笠原村・榊村・野々瀬村が合併し、さらに昭和35年（1960）豊村を併せて現在の櫛形町に至っている。

第Ⅱ章　遺跡各説

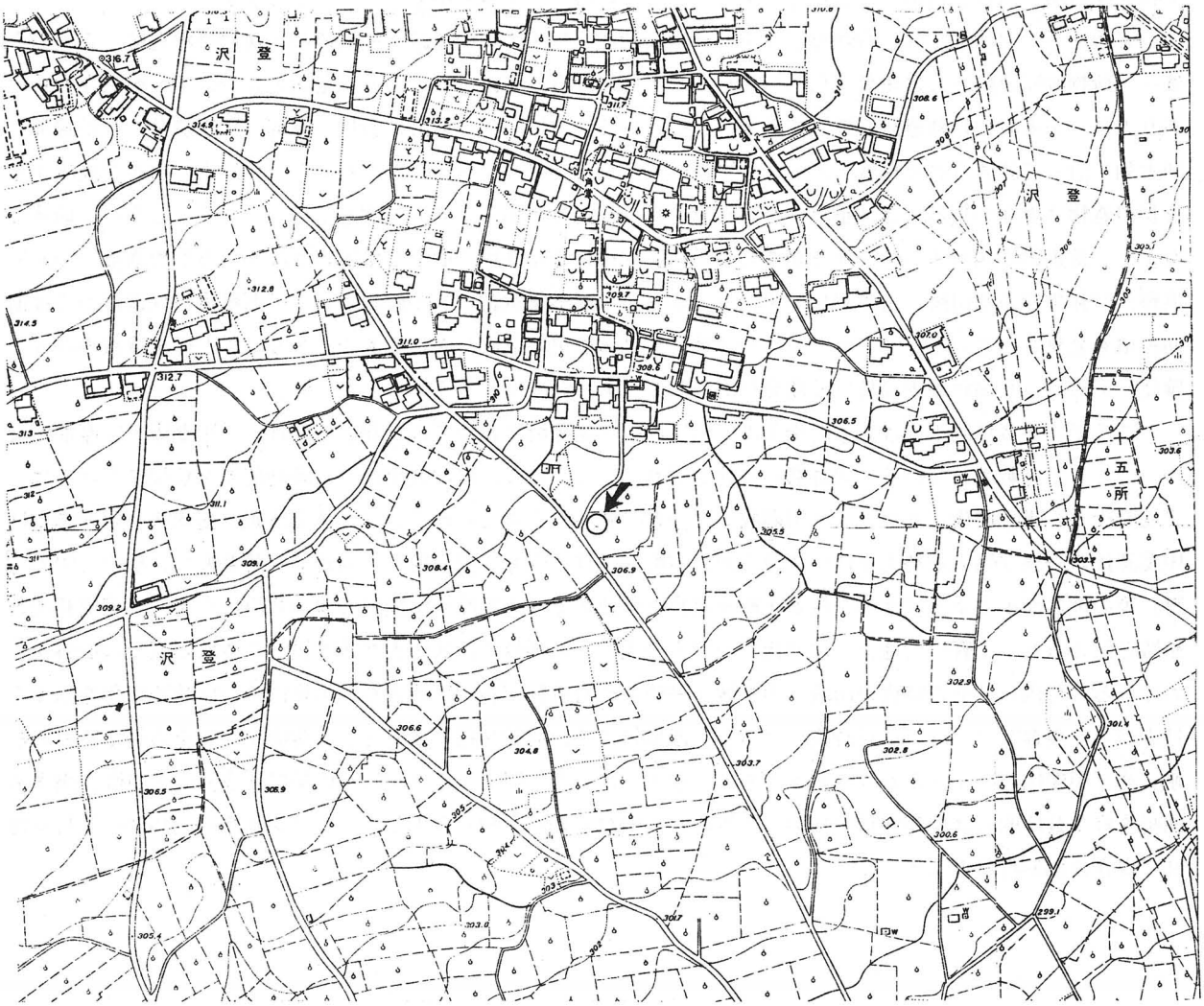
第１節　町道11号線建設に伴う赤面Ｃ遺跡調査

１）調査に至る経緯と経過

櫛形町では、平成７・８年度に町内北部を東西に横断する町道11号線の建設を計画した。この道路は主要地方道甲府ー櫛形線と国道52号線を東西に結ぶもので、幅員16m 総延長は約２kmに及ぶものである。この11号線予定路線は、櫛形町沢登字七ツ内において赤面Ｃ遺跡南端部をかすめるように計画されていた。そのため櫛形町教育委員会は、櫛形町と埋蔵文化財の保護にむけた協議をおこなった。赤面Ｃ遺跡は字赤面から字七ツ内にかけて存在する埋蔵文化財包蔵地で近世の遺物が採集されていたが、遺跡がのる櫛形町北半部は御勅使川によって運ばれた厚い扇状地堆積物に覆われ、過去何ヶ所かの試掘調査においても遺構の確認ができなかった地域であるため、試掘調査を実施し、本調査の必要の有無を確認することとなった。

調査は平成８年２月１日から同月13日まで行ったが、厚い扇状地堆積層の下部、現地表下1.5～1.8m ほどでローム質土層を確認し、試掘トレンチの一部ではあったが同土層中から弥生期末の遺物や多量の焼土・炭化物を発見した。

そのため遺構の確認はできなかったものの、町教育委員会は山梨県教育委員会の指導をうけつつ櫛形町建設課と協議を行い、試掘調査の範囲を拡げ再調査を実施することとした。本道路の建設工事は年度明けから実施する



第２図　赤面Ｃ遺跡周辺地形図〔１／5,000〕

こととなっていたため、櫛形町建設課の協力のもと再度の試掘調査は新年度早々の４月５日から行い、４月26日に終了した。

2）遺跡の位置と環境

町道11号線は町内北部を東西に横断しているが、櫛形町沢登字七ツ内において赤面Ｃ遺跡の南端部を横切って進んでいる。赤面Ｃ遺跡は、北西から南東方向に穏やかに降っている御勅使川扇状地上に占地し、字赤面から字七ツ内にかけて所在している。遺跡は扇状地上を周囲と50cm程の比高差をもって、北西から南東方向に延びている幅30～50m の尾根状の微高地先端部に占地する。櫛形町内における御勅使川扇状地の試掘例では、厚い扇状地堆積物の下部にこの微高地と同様に北西から南東方向に延びる幾本かのローム質土層が確認されており、今回の調査でも現地形で尾根上の部分ではローム質土層が確認され、その周囲では砂礫層のみが確認されている。扇状地形成の過程の中で、河道の変化とそれに伴う遺跡の存在を窺わせるものであった。なお、この尾根の線をまっすぐに500m 程南東にのばすと十五所遺跡が存在する。

3）調査の方法と方向と経緯

平成７年度の試掘では、幅４m 長さ50m のトレンチを設定したがトレンチ中央部で15～20m にわたって遺物・焼土・炭化物が検出されていた。しかしその両側では遺物・焼土は全く検出されず、遺物包含層であるローム質土層も両側へ深く落ち込んでいた。また、このトレンチは道路予定地の北辺に沿って設定していたため、とりあえずこの部分を南方向へ６m 程拡張し、遺物・焼土の検出範囲を確定し遺構の発見に努めることとした。したがって、今回新たに発掘した面積は約120㎡で平成７年度分の再調査部分と合わせても320㎡程である。

調査は、現地表下1.5～1.8m ほどのローム質土層の上面までは重機によって排土し、後人力によって掘り下げ、遺構・遺物の検出を行った。遺物・焼土・炭化物の分布範囲は、南へ４～５m でおわり、ローム質土層自体も拡弱区南端では南側へむかって落ち込んでいる。そのため遺物・焼土の確認された範囲は約160㎡ほどであった。

重機による排土面から10cmほど掘り下げたところ特に遺物・焼土の密集する部分を確認したため、幅50cmのサブトレンチを設定した。サブトレンチ内から固くしまった焼土溜まりを検出したため拡張したところ竪穴住居址１軒を検出した。この住居址以外、遺構の検出はなされなかったため、今回の調査において完掘することとし、４月26日に調査を完了した。

4）発見した遺構と遺物

①　１号竪穴住居址

発掘区のほぼ中央から検出された。規模は５×4.3m で楕円形平面を呈し、長軸方位はＮ－43°－Ｗを示している。掘込みはローム質土層の下部まで達し、壁高は30～40cmを測る。壁はなだらかに立ち上がる。覆土は17層にわけられ自然堆積を示す。全体的に微少な礫、焼土、炭化物が混入している。床面は固い貼床で特に中央部から炉跡周辺は顕著であった。

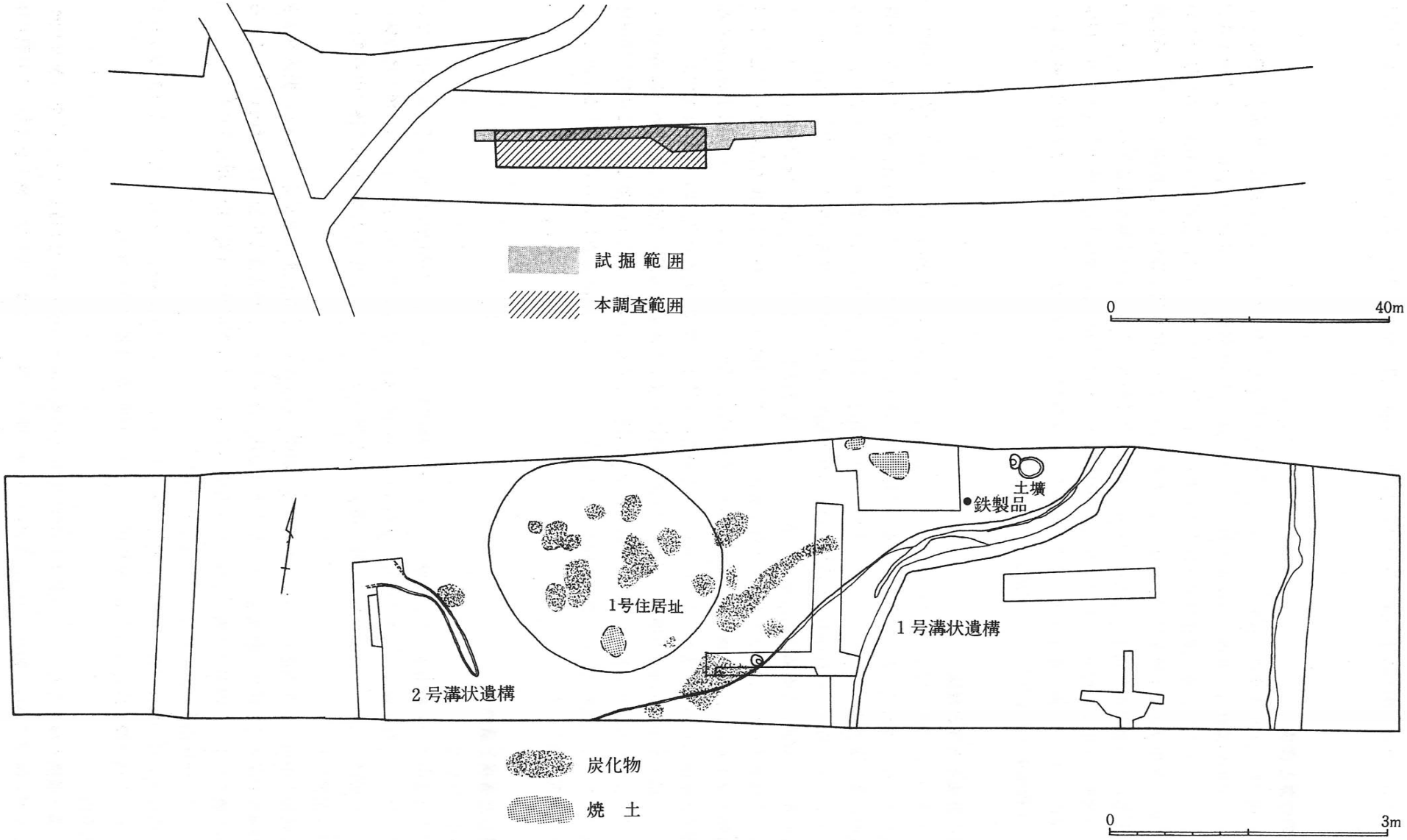
炉は長軸線上中央やや北西寄りにつくられている。規模は80×60cmで、楕円形平面を呈している。掘込みは浅く５～10cm程の深さで、皿状の断面を示す。炉周囲は堤状に盛りあがり、炉底部と床面とはほぼ同レベルである。炉壁は固く焼きしまり、内部には焼土ブロックが充填している。また炉周囲には炭化物が認められた。

ピットは８ヶ所検出されたがP_1からP_5及びP_7が柱穴であろう。

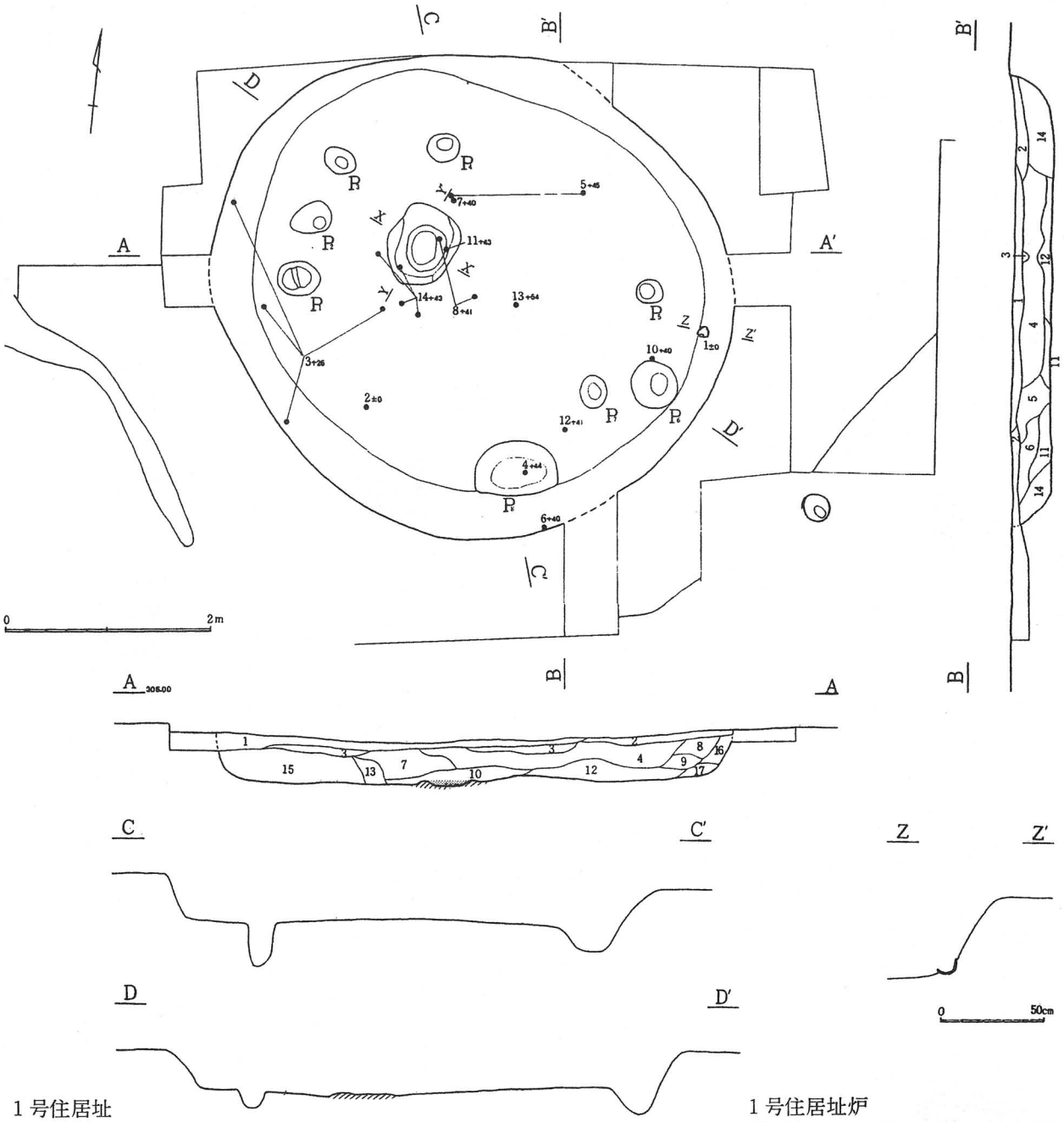
遺構の遺存が非常に良好であったことに対し、床面上から得られた遺物は極端に少なく図示しえるものはわずか１点であった他は覆土内からの出土で断片化していた。時期は弥生期の末である。

②　溝状遺構

２本の溝状遺構が検出された。１号溝は１号竪穴住居址の東４m から南0.5m 程で確認され、北東～南西方向へ蛇行しながら延びている。幅40～80cm、深さ10～15cmを測り、覆土には礫、炭化物、焼土を含む。１号竪穴住



第3図　赤面C遺跡調査位置図及び遺跡配置図〔1／800・1／120〕

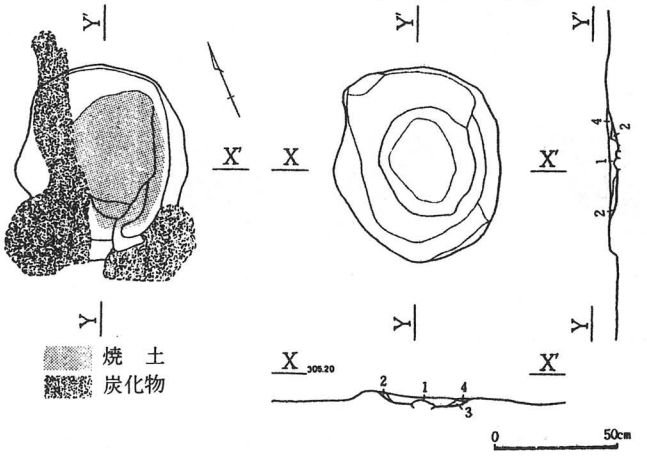


1号住居址

1層：暗黄褐色土層　粘性強、しまり有、粒子密、指頭大～拳大礫が少量、炭化物を微量含む。
2層：茶褐色土層　粘性強、しまり普通、粒子密。
3層：暗黄褐色土層　粘性強、しまり有、粒子密、ローム粒が少量、炭化物を微量含む。
4層：暗茶褐色土層　粘性強、しまりやや有、粒子密、指頭大の礫を中量含む
5層：暗茶褐色土層　粘性強、しまりやや有、指頭大の礫を多量含む。
6層：暗黄茶褐色土層　粘性強、しまりやや有、粒子密、小ブロックを中量、指頭大の礫を少量含む。
7層：暗茶褐色土層　粘性強、しまりやや有、粒子密、指頭大の礫を小量含む
8層：茶褐色土層　粘性やや強、しまり有、粒子密、指頭大礫を少量、炭化物を微量含む。
9層：暗茶褐色土層　粘性強、しまり有、粒子密、指頭大の礫・炭化物を微量含む。
10層：暗茶褐色土層　粘性強、しまり普通、粒子密、焼土粒・炭化物を微量含む。
11層：淡茶褐色土層　粘性強、しまりやや有、粒子密。
12層：淡茶褐色土層　粘性強、しまり有、粒子密、炭化物を微量含む(粘土に近い)。
13層：茶褐色土層　粘性やや強、しまり有、粒子密、指頭大の礫・ロームブロックを微量、炭化物を少量含む。
14層：淡茶褐色土層　粘性強、しまり有、粒子密。
15層：茶褐色土層　粘性やや強、しまり有、粒子密、指頭大の礫・ロームブロック・炭化物を微量含む。
16層：茶褐色土層　粘性強、しまりやや有、粒子密。
17層：暗茶褐色土層　粘性強、しまり有、粒子密、炭化物を少量含む

1号住居址炉

1層：焼土ブロック主体層　3層：ローム＋炭化物
2層：ローム＋焼土ブロック　4層：炭化物主体層



第4図　1号住居址・炉〔1／60・1／30〕

南側は遺構確認面が急激に落ち込んでおり、この溝も住居址に南隣して自然消滅している。

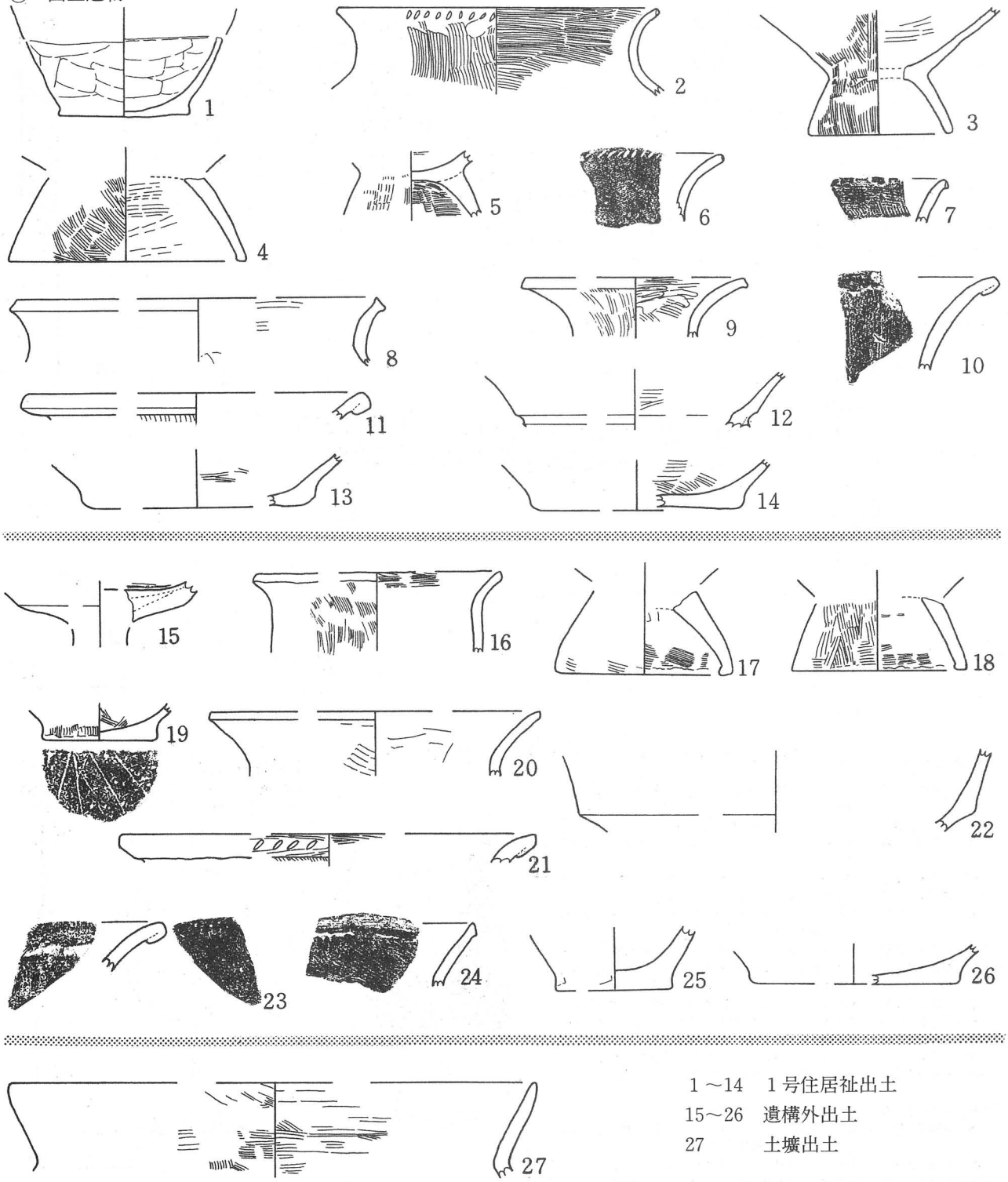
２号溝は、１号竪穴住居址の西60cm程で検出され、幅10～20cm、深さ10cmほどである。北西から南東方向に延びているが、北半部は既に削平されている。先述した遺物・焼土・炭化物の分布はほぼこの両溝に囲まれた範囲に認められた。

なお、発掘区東端部にみられる溝状の落ち込みは、第１次試掘調査において確認されていた自然流路である。

③　土壙

規模は30×20cmで　円形平面を呈し深さは20cm程を測る。

④　出土遺物



１～14　１号住居祉出土
15～26　遺構外出土
27　　土壙出土

第５図　赤面Ｃ遺跡出土遺物〔１／３〕

0　10cm

第１表　赤面Ｃ遺跡出土遺物観察表

1	壺	法量：底径 6.7cm。器高 4.1cm。現存率：底部完。調整：外面－ヘラナデのちミガキ。内面－ヘラナデのちナデ。胎土：細砂粒長石を含み密。色調：淡明褐色。焼成：良。床直（壁面）出土。１号住出土。
2	甕	法量：口径（16.6）cm。現存率：口縁部⅛。調整：外面－口唇部刻目。タテハケ。内面－ヨコハケ。胎土：細砂粒、金雲母を含む。色調：暗茶褐色～茶褐色。焼成：良。１号住出土
3	台付甕	法量：底径 5.1cm。高台径（7.6)cm。現存率：底部～脚部½。　調整：外面－タテハケ。内面－胴部ヨコハケ。脚部ナナメハケのちナデ。胎土：細砂粒・長石を含む。色調：赤褐色（内面黒色－煮こごり)。　焼成：やや良。１号住出土
4	台付甕	法量：底径（8.2）cm。脚部径（12.2）cm。現存率：脚部破片。調整：外面－ナナメハケのちナデ（部分）。内面－ヨコハケのち丁寧なナデ。胎土：細砂粒を含み密。色調：淡明褐色。焼成：良。１号住出土
5	台付甕	法量：底径 5.2cm。現存率：底部～脚部½。調整：外面－タテハケ。内面－脚部ヨコハケ、シボリ。胎土：密。色調：淡赤褐色。焼成：良。１号住出土
6	甕	現存率：口縁～頸部破片。調整：外面－口唇部刻目。ナナメハケ。内面－ナデ。胎土：密。色調：淡褐色。焼成：良。１号住出土
7	甕	現存率：口縁部破片。調整：外面－口唇部刻目。口縁部ヨコハケ。頸部タテハケ。内面－粗いヨコハケ。胎土：細砂粒、金雲母を含み密。色調：淡暗茶褐色。焼成：良。１号住出土
8	壺	法量：口径（19.3）cm。現存率：口縁部⅛。調整：外内面－ナデ。胎土：砂粒・長石を含み密。色調：淡褐色。焼成：良。１号住出土
9	壺	法量：口径（11.4）cm。現存率：口縁部⅛。調整：外面－口唇部～口縁部ナデ。頸部タテハケのちナデ。内面－口縁部ヨコハケのちミガキ。頸部ヨコハケ。１号住出土
10	壺	現存率：口縁部破片。調整：外面－口縁は粗雑な折り返し。口縁部ナデ。頸部タテハケのちミガキ。内面－口縁部ミガキ。頸部ヨコハケ。１号住出土
11	壺	法量：口径（18.1）cm。現存率：口縁部⅛。調整：外面－口縁部は厚く丁寧な折り返し。タテハケのち口唇部ナデ。内面－ナデ。胎土：砂粒・長石・雲母を含み密。色調：淡明褐色。焼成：良。１号住出土
12	壺	法量：頸部径（12.2）cm。現存率：頸部～口縁部（⅛）。調整：外面－ナデのちミガキ。内面－ヨコハケのち丁寧なナデ。頸部に内外面に段を持ち口縁は開き気味で直線的に立つ。１号住出土
13	壺	現存率：底部¼。調整：内面－ヨコハケ。胎土：細砂粒を含み密。色調：淡褐色。焼成：良。１号住出土
14	壺	法量：底径（10.8）cm。現存率：底部⅛。調整：外面－丁寧なナデ。内面－ヨコハケ。胎土：細砂粒・長石を含み密。色調：暗茶褐色。焼成：良。１号住出土
15	高　坏	法量：脚部径（3.2）cm。現存率：接合部⅓。調整：外面－丁寧なナデ。内面－ミガキ。皿状になした脚部に坏部をソケット状に接合する。胎土：長石を含み密。色調：淡褐色。焼成：良。遺構外出土
16	甕	法量：口径（12.8）cm。胴部径（10.4）cm。現存率：口縁～胴部⅛。調整：外面－口唇部ナデ。口縁～胴部タテハケ。内面－口縁部ヨコハケ。胴部ナデ。胎土：金雲母・長石を含み密。色調：赤茶褐色～淡茶褐色。焼成：良。遺構外出土
17	台付甕	法量：口径（9.4）cm。現存率：脚台部¼。調整：外面－ハケ。内面－ヨコハケ。脚台部は内湾して立ち上がる。胎土：密。色調：淡赤褐色。焼成：良。遺構外出土
18	台付甕	法量：口径（9.1）cm。現存率：脚台部⅛。調整：外面－タテハケ。底部ヨコハケ。内面－ヨコハケ。脚台部は直線的に立ち上がる。胎土：長石・細砂粒を含み密。色調：淡赤褐色。焼成：良。遺構外出土
19	壺	法量：底径5.9cm。現存率：底部½。調整：外面－胴部タテハケ。底部木葉痕。内面－ナナメハケ。胎土：長石・細砂粒を含み密。色調：明茶褐色～黒褐色。焼成：良。遺構外出土
20	壺	法量：口径（17.1）cm。現存率：口縁部⅛。調整：外面－口唇部～口縁部ナデ。胴部粗いハケ。内面－口縁部ヨコハケ。胎土：細砂粒・長石を含み密。色調：赤褐色～淡赤褐色。焼成：良。遺構外出土
21	壺	法量：口径（21.2）cm。現存率：口縁部⅛。調整：外面－口縁部折り返し、外縁に刻目。ヨコハケ。内面－ヨコハケ。胎土：細砂粒を含み密。色調：淡明褐色。焼成：良。遺構外出土
22	壺	法量：頸部径（20.4）cm。現存率：頸部⅛。調整：器面が荒れ、不明。頸部は段部を有し、直立気味に立つ。胎土：細砂粒・長石を含み密。色調：淡茶褐色。焼成：良。遺構外出土
23	壺	現存率：口縁部破片。調整：摩滅のため不明。頸部はかなり開いて立ち上がり、口縁は折り返し、折り返し部内縁に刻目。胎土：長石・細砂粒を含み密。色調：淡橙褐色。焼成：良。遺構外出土
24	甕	現存率：口縁部破片。調整：口唇部ヨコハケ・ナナメハケ。内面－ヨコハケ。胎土：長石を含み密。色調：(内）淡茶褐色。（外）黒褐色。焼成：良。遺構外出土
25	壺	法量：底径 5.8cm。現存率：底部½。調整：外面－ナデ。胎土：雲母・細砂粒を含み密。焼成：良。遺構外出土
26	壺	法量：底径（10.8）cm。現存率：底部⅙。調整：外面－ヨコハケのちナデ。内面－ナデ。胎土：長石・細砂粒を含み密。焼成：良遺構外出土
27	壺	法量：口径（27.2）cm。現存率：口縁部⅛。調整：外面－ハケのちナデ。内面－ヨコハケのちナデ。直立気味にやや内湾して立ち上がる。胎土：雲母・長石を含み密。色調：淡褐色～淡暗褐色。焼成：良。土壙出土

第２節　ケア・ハウス建設に伴う藤塚遺跡試掘調査

１）調査に至る経緯と経過

福祉法人「櫻樹会」は櫛形町小笠原字藤塚に於いてケア・ハウスの建設を計画し、櫛形町教育委員会に当該地に於ける埋蔵文化財の有無及び取り扱いについて問い合わせた。同予定地南半部は藤塚遺跡に含まれていたが、同地は扇状地堆積物が厚く堆積する地であるため、遺物の散布は認められるものの遺跡としての内容は確実には把握されていなかった。そのため櫛形町教育委員会としては、とりあえず試掘調査を実施し本調査についてはその結果を参考として再度協議をすることとした。

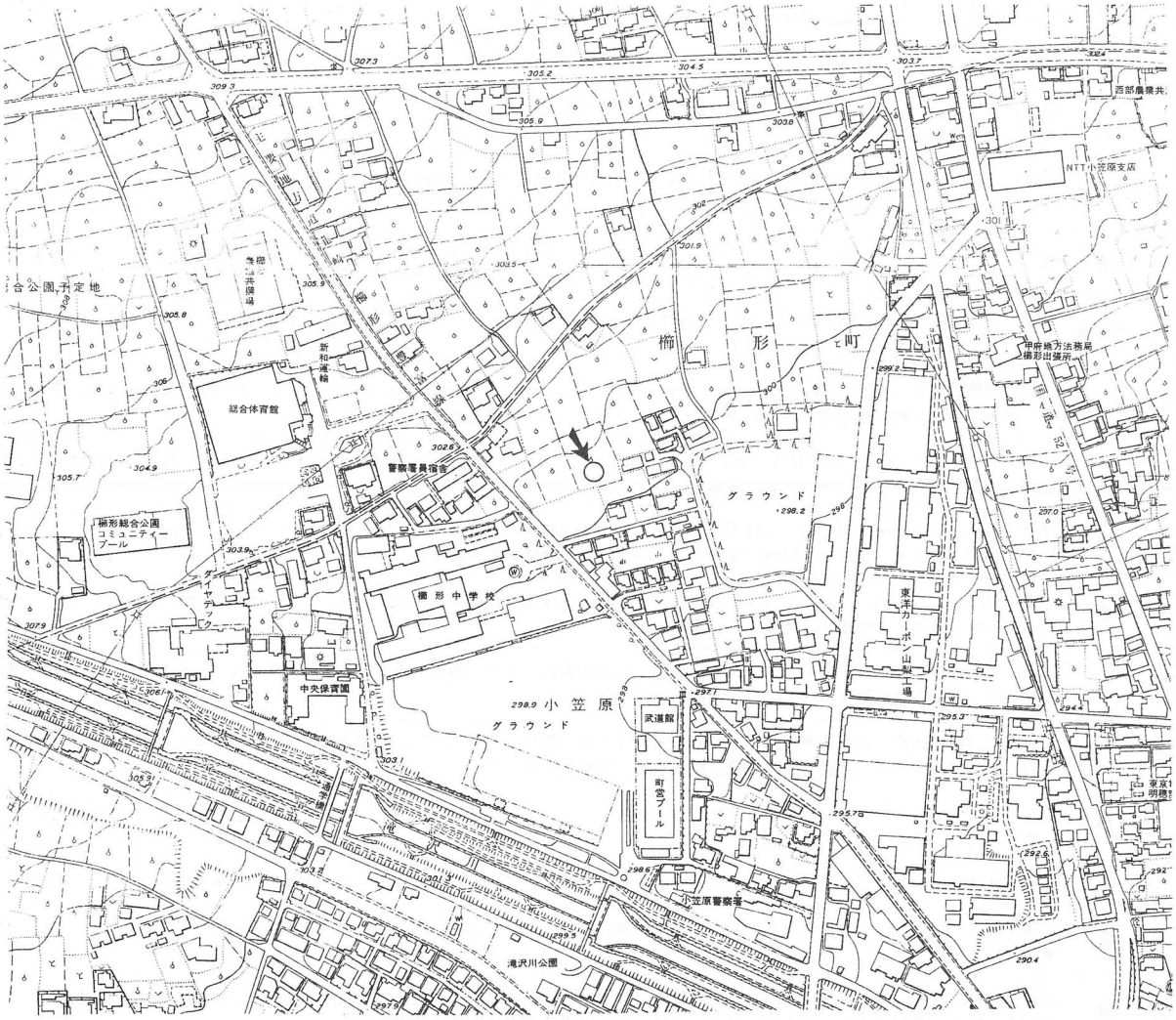
調査期間　　平成８年８月12日～同月25日

調査面積　　70㎡

２）遺跡の位置と環境

本建設予定地は、櫛形町小笠原地内にあり櫛形町立櫛形中学校に近接している。現在は削平されているが、かっては「ふじつか」とよばれる塚が存在したと伝えられ字名の由来となっているが、おそらく富士塚であったと考えられる。

櫛形町の東半部は、御勅使川のつくる大きな複合扇状地となり全般的に厚い礫層におおわれている。しかし、甲西バイパス建設に伴う調査等によって多くの遺跡が確認されている。本遺跡の周辺でも３～４ヶ所の遺跡が試掘調査され、遺構や目立った遺物は確認されなかったものの、土壌の安定した箇所や若干の遺物が出土しており、

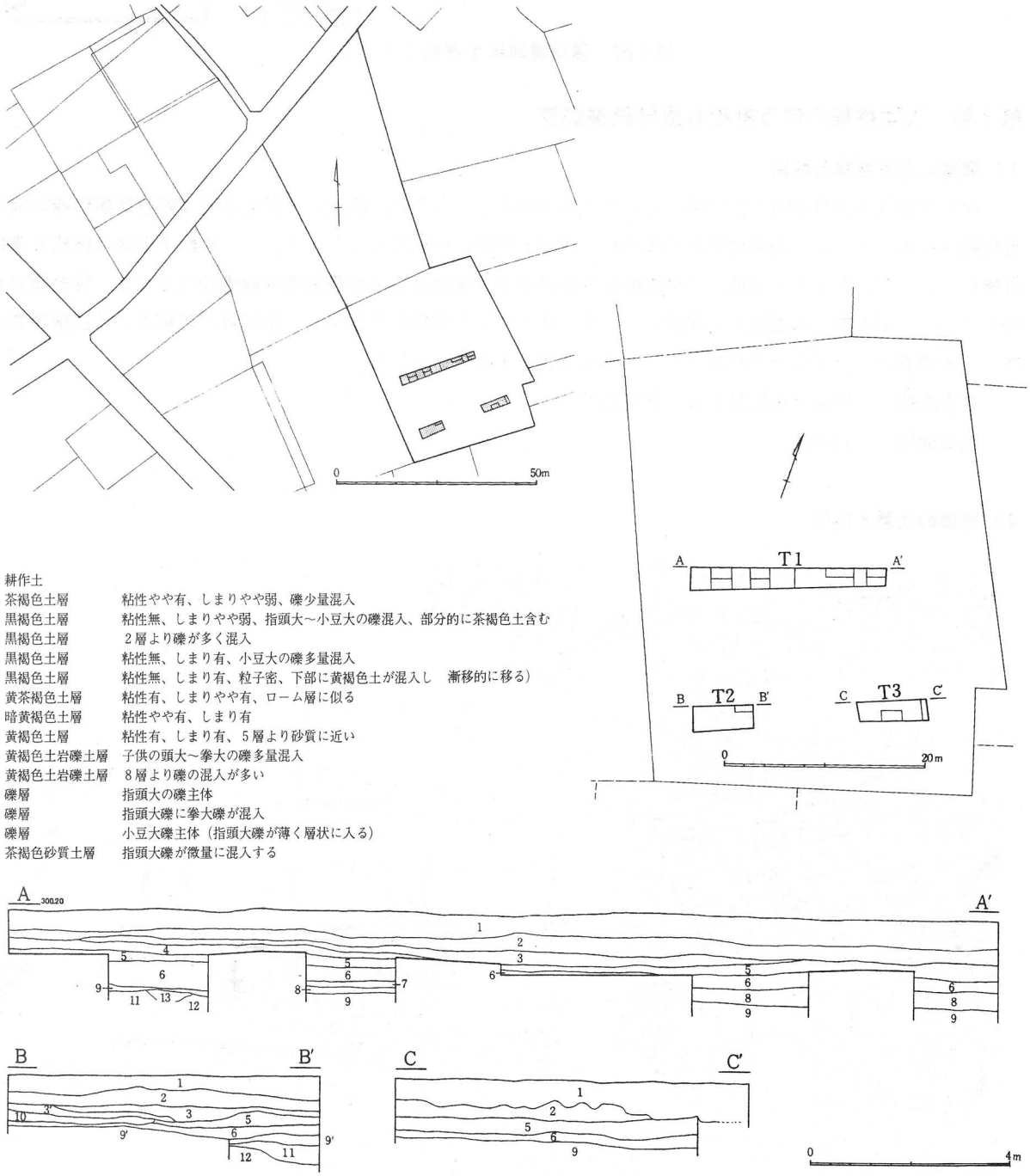


第６図　藤塚遺跡周辺地形図〔１／5,000〕

弥生期の条痕紋系の土器片もえられている。

3）調査の経緯と成果

本事業予定面積は約2000㎡であった。藤塚遺跡は本事業予定地の南半部を範囲としており、また北半部は30～40cmほど土盛りをしたうえで駐車場とする計画であった。そのため建物の建設が計画されている南半部に３本の試掘トレンチを設定した。トレンチは全て東西方向に設定され、各々２×20m、２×７m、２×８mの規模であった。重機によって１～1.3m程掘り下げ、後人力によって精査した。しかし、現地表下1.5mまで礫・砂礫層が互層となって堆積していたため調査を完了した。



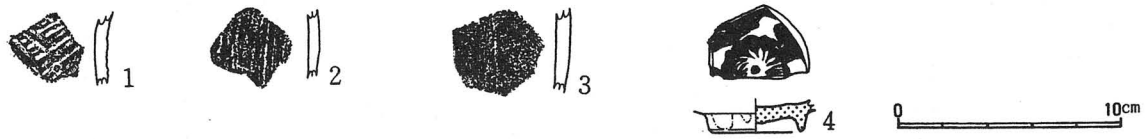
第７図　ケア・ハウス建設用地試掘トレンチ位置図及びセクション図〔１／1500・１／60・１／120〕

4）出土遺物

遺物は十数点が出土したがすべて細片化していた。しかし中に数点弥生期の条痕紋系の土器片がふくまれており、周辺から出土している同期の土器ともあわせて興味深いものがある。

第２表　藤塚遺跡出土遺物観察表

1	甕	現存率：胴部破片。調整：外面ー粗い条痕。胎土：砂粒を含み密。色調：淡茶褐色。焼成：良。
2	甕	現存率：胴部破片。調整：外面ー粗い条痕。胎土：金雲母・細砂粒を含み密。色調：赤茶褐色。焼成：やや良。
3	甕	現存率：胴部破片。調整：外面ーやや粗い条痕。胎土：金雲母・長石を含み密。色調：淡赤褐色。焼成：良。
4	高台付茶碗	法量：高台径 4.3cm。現存率：底部１／２。高台部貼付。胎土：密。色調：青乳白色。焼成：良。



第８図　藤塚遺跡出土遺物〔１／３〕

第３節　工場移転に伴う枇杷Ｂ遺跡試掘調査

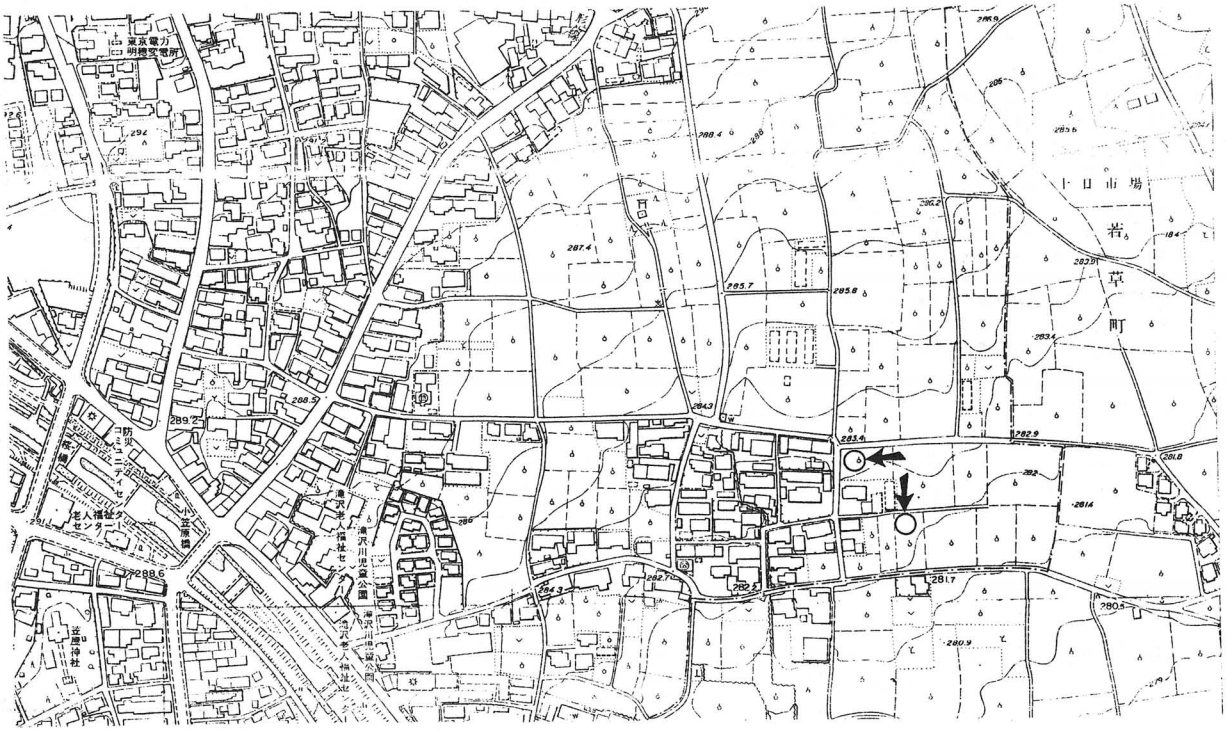
1）調査に至る経緯と経過

（株）共進食品は若草町十日市場において工場を経営していたが、同地が主要地方道韮崎豊富櫛形線の建設予定路線内に入ったため、隣接地である櫛形町小笠原字枇杷に移転することとなった。移転予定地は枇杷Ｂ遺跡に近接していたが、たまたま同地では櫛形町教育委員会が主要地方道韮崎豊富櫛形線建設にともなう発掘調査を実施しており、平安期の集落遺跡を確認していた。そのため工場移転予定地も、原因者の理解をえて試掘調査を実施し、本調査についてはその結果をもって再度協議をすることとした。

調査期間　　平成８年12月15日～同月28日

調査面積　　150㎡

2）遺跡の位置と環境

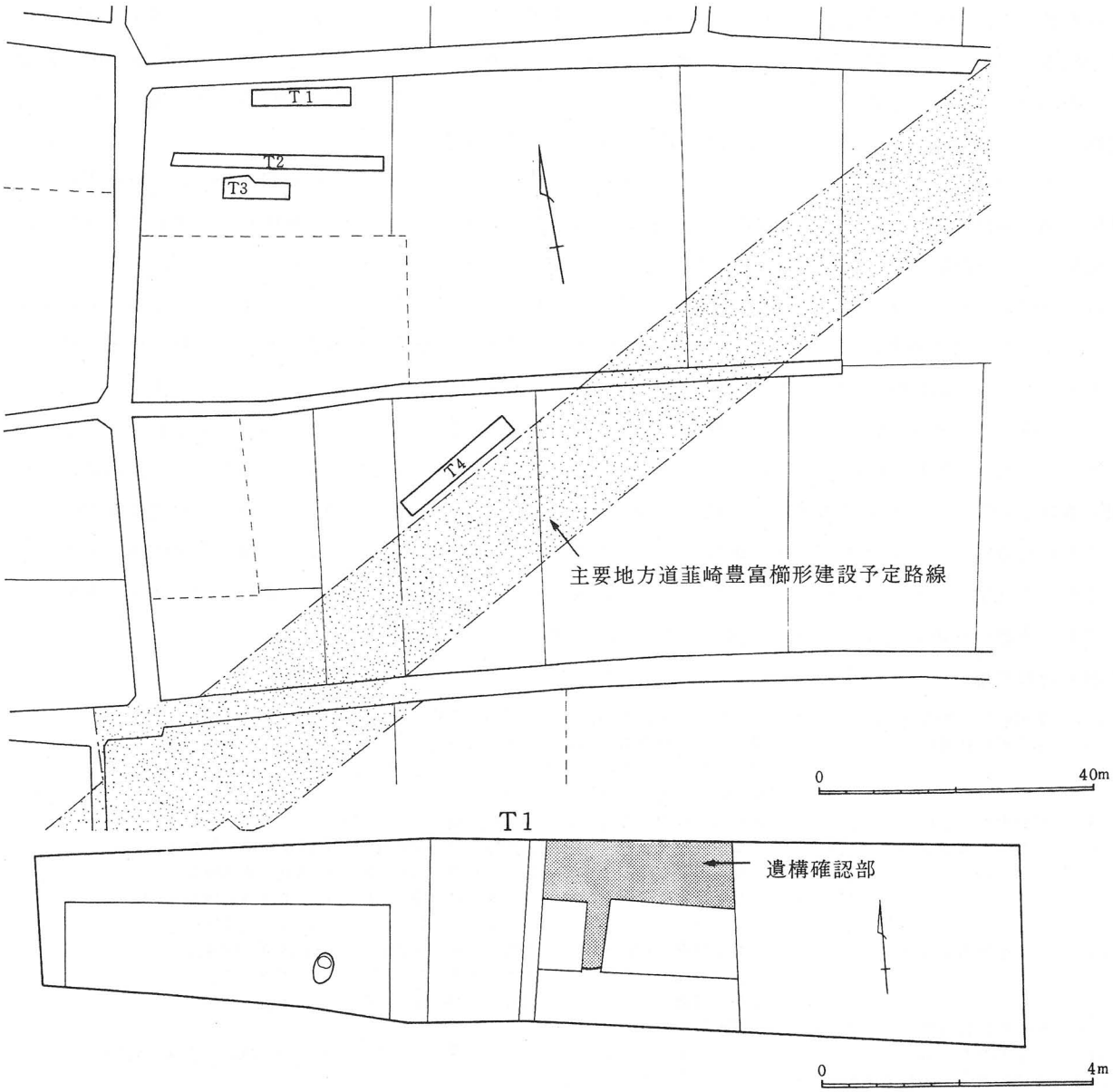


第９図　枇杷Ｂ遺跡周辺地形図〔１／5000〕

今回、試掘調査を実施した地点は櫛形町小笠原字枇杷に所在する。小笠原字枇杷は本町でも東南辺部にあたり町道を隔てて若草町に隣接している。櫛形町の東半部は、御勅使川のつくる大きな複合扇状地となり全般的に厚い礫層におおわれている。しかし、この扇状地上でも、甲西バイパス建設に伴う調査等によって多くの遺跡が確認さて、本遺跡の東750m程にも同調査によって発見された村前東A遺跡が存在している。またこの複合扇状地は隣接する若草町、甲西町に至ると扇端部に達し弧状の湧水列を造っているが、本遺跡の南西200m程にも、枇杷ヶ池と呼ばれる湧水が存在し、この一帯が湧水列の最上部にあたることを示している。微地形的に観察すると、この枇杷ヶ池から南西方向に僅かに谷状の地形が刻まれており、今回の調査地点は、谷状地の東側に北西から南西に延びる微高地の西縁にあたっている。

3）調査の経緯と成果

工場予定地は駐車場も含めて1800㎡であった。工場建物建設予定地に３本（Ｔ１～Ｔ３）、駐車場予定地の１本（Ｔ４）と計４本の試掘トレンチを設定した。トレンチの規模は各々３×15m（Ｔ１）、２×30m（Ｔ２）、３×10m（Ｔ３）、２×20m（Ｔ４）で、T1～T3はほぼ東西に、T4は北東―南西方向に設定した。 隣接地で実施していた主要地方道韮崎豊富櫛形線建設にともなう発掘調査によれば、地表下１m程が遺構確認面であったため、そ



第10図　工場移転用地内試試掘トレンチ位置図〔１／1000、１／100〕

の深さまで重機で掘削したが、Ｔ４ではすでにその深さまで攪乱が及んでいたため遺物等の検出はできなかった。しかし、工場建設予定地では基本土層がローム質土層で状態も良好であったため、さらに土層の状態を観察しながら重機による掘り下げを継続した。Ｔ1及びＴ2では、地表下1.5mほどで黒色土層にあたったため以下を人力で掘り下げ精査した。この黒色土層の上半部は厚さ10cmにわたって焼土・炭化物が混入し、古墳時代初頭の遺物の包含層となっていた。特にＴ1では遺物・焼土の検出が顕著で、地表下1.6m程で落ち込み（図中スクリーントーン部）が確認された。遺物はＴ2・Ｔ3でも確認されたが、Ｔ3南西部では攪乱が地表下２m以下まで及んでいた。

今回の試掘では、その性格・内容までは把握しえないものの遺構と考えられる落ち込みや良好な包含層を確認した。包含層の深さは地表下1.6m以下でかなり深いものであったが、事業計画では建造物の基礎が地表下1.4～1.5mに及ぶとのことであり、原因者と協議を行い本調査を実施することとした。

なお、Ｔ4では地表下１m程まで遺物が確認できず、駐車場予定地でもあったため本調査の範囲からは除外した。

第Ⅲ章　まとめ

先に述べたように櫛形町の東半部、北半部は御勅使川に由来する扇状地堆積物が厚く覆うため、地表面においては近世・近代の遺物が散見しうる程度で明確な遺跡は確認できなかった地域であった。[1]しかし近年の試掘調査等の成果[2]を受け、この地域でも弥生時代に遡りうる遺跡の可能性を指摘した[3]ところである。また櫛形町・若草町・甲西町を貫通する甲西バイパスに伴う調査によって、扇端部に近い櫛形・若草両町の町境一帯では村前東Ａ遺跡[4]・十五所遺跡[5]などの平安・古墳・弥生時代の良好な遺跡が調査されている。

今年度の調査では、赤面Ｃ遺跡からは弥生時代末期に遡る住居址が検出され、枇杷Ｂ遺跡では古墳時代初頭の遺構が強く期待されている。赤面Ｃ遺跡は扇状地扇央部に近く、周辺からはかって耕作時に16世紀代の五輪塔群が発見[6]され、甲西バイパス建設に伴う調査[7]によっても中近世の溝状遺構が検出されたところであった。このような扇状地内にあっても地下深くに弥生期に遡る遺構が埋もれている事は驚きであり、今後に向け注意を喚起するものとなった。この遺跡は、現状でも扇状地内の微高地上に占地しており、当該地における遺跡立地の典型を示すものであろう。藤塚遺跡では遺構の検出はできなかったが、従来の調査と同様条痕紋系の土器が出土している。今回の試掘地点の東50～60m程では、山梨県埋蔵文化財センターが試掘調査を実施し同じく条痕紋系の土器が発見されており[8]、今後の本調査に期待したい。枇杷Ｂ遺跡は平安期の集落遺跡[9]とされていたが、今回古墳時代初頭の遺物が発見され、村前東Ａ遺跡と同様に該期に湧水列上に進出した遺跡群の一つである可能性も指摘しうる。

これらの資料は、この釜無川以西の地域のみではなく、甲府盆地全体への弥生文化に進出と展開のあり方について新たな知見をもたらしたものといえる。また、従来とかくなおざりにされがちであった扇状地上の開発に際しても、埋蔵文化財に対する注意と保護の必要性を訴えるものであろう。

引用・参考文献

註１　櫛形町教育委員会　１９９０　櫛形町文化財調査報告№８　『町内遺跡詳細分布調査報告書』
註２　櫛形町教育委員会　１９８９　櫛形町文化財調査報告№７　『大畑遺跡』
　　同　１９９３　櫛形町文化財調査報告№10　『柿平土地区画整理事業地内試掘調査報告』
　　同　１９９５　櫛形町文化財調査報告№13　『柿平Ｂ遺跡』
註３　櫛形町教育委員会　１９９６　櫛形町文化財調査報告№15　『町内遺跡試掘調査報告』
註４　山梨県教育委員会　１９９４　山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第90集　『村前東Ａ遺跡概報１』
　　同　１９９５　山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第108集　『村前東Ａ遺跡概報２』
　　同　１９９６　山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第112集　『村前東Ａ遺跡概報３』
　　同　１９９７　山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第134集　『村前東Ａ遺跡概報４』
註５　山梨県教育委員会　１９９５　山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第104集　『十五所遺跡概報１』
　　同　１９９６　山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第113集　『十五所遺跡概報２』
　　同　１９９７　山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第128集　『十五所遺跡概報３』
註６　櫛形町誌刊行委員会　１９６６　『櫛形町誌』
註７　山梨県教育委員会　１９９１　山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第60集　『七ツ内Ｃ遺跡調査報告書』
註８　森原明廣氏（山梨県埋蔵文化財センター）のご教示による
註９　櫛形町教育委員会では今回の試掘調査に並行して、枇杷Ｂ遺跡内に於ける主要地方道建設に伴い発掘調査を実施しているが、その成果によれば発見された遺構はすべて平安時代所産のものである。

附　章　山梨県櫛形町赤面Ⅰ遺跡出土の鉄製品等の分析・調査

川鉄テクノリサーチ株式会社　分析・評価センター
岡原　正明　　伊藤　俊治

1、はじめに

山梨県櫛形町教育委員会が発掘調査をおこなった櫛形町赤面Ⅰ遺跡から出土した鉄製品等について、学術的な記録と今後の調査のための一環として化学成分分析を含む自然科学的観点での調査の依頼があった。

調査の観点として、①残存金属の確認、②金属鉄成分の分析、③加工状況や観察上の特記事項など、を中心に調査した。

2、調査項目および・検査方法

1）試験項目

資料No	資料の性格	着磁力	重量g	外観写真	成分分析	組織写真	ＥＰＭＡ	Ｘ線透過写真
1	銹化鉄塊	やや強	16.9	○				○
2	鉄 製 品	強	45.6	○	○	○L，C	○L，C	○

註　①資料の性格分析・考察の結果に基づいて行った。②Ｌは資料の長手方向、Ｃは同断面方向を表す。

2）重量計測と着磁力調査

計重は電子天秤を使用して行い、小数点１位で四捨五入した。また着磁力調査については、直径30mm・1300ガウス（0.13テスラ）のリング状フェライト磁石を使用し、官能調査により「強・やや強・中・やや弱・弱」のランクで個別調査結果の文中に表示した。

3）外観の観察と写真撮影

上記各種試験用資料を採取する前に、資料の両面をmm単位まであるスケールを同時写し込みで撮影した。また資料採取の位置と状況についても撮影を行った。

4）化学成分分析

化学成分分析はＪＩＳの分析法に準じて行った。分析方法及び分析結果は後記してある。この調査は、化学成分から鉄をつくるために使用した原料の推定をするために実施し、分析項目は11成分に及ぶ。なお、炭素(Ｃ)と硫黄(Ｓ)は資料の原形をなるべく損なわないよう、採取資料の量を少なくしたため割愛した。

5）顕微鏡組織写真

資料の一部を切り出し樹脂に埋め込み、細かい研磨剤などで研磨（鏡面仕上）した。その後、顕微鏡で観察しながら代表的な断面組織を拡大して写真撮影し、金属組織や介在物（不純物）の存在状態等から加工状況や材質を判断した。原則として100倍と400倍で撮影した。また必要に応じ顕微鏡による20倍の観察もおこなった。

6）ＥＰＭＡ（Ｘ線アイクロアナライザー）による観察

高速電子線を200$\mu m\phi$ 程度に絞って、分析対象試料面に照射し、その微小部に存在する元素から発生する特性Ｘ線を測定するもので、金属鉄中の介在物や鉄滓の成分構成を視覚から確認するために、二次元の面分析を行った。

7）Ｘ線（放射線）透過試験

Ｘ線発生装置を用い最適のＸ線強度を選択して、写真撮影を行った。同一のＸ線強度と照射時間の場合には、照射される物質の質量が重い程、また寸法が厚い程Ｘ線が吸収され写真（印画紙）上では黒くなり、その反対ではＸ線が簡単に透過する関係上白く写る（ポジ焼付）。資料の状況を正確に把握するためネガ写真で検討した。従って、凹凸や異種金属が共用されているとか銹で金属部分が薄くなっている場合でも状況が濃淡で判別しうる。

3、調査及び考察結果

Ａ　資料No１　銹化鉄塊

長さ42mm、幅28mm、厚さ3.5mmの水酸化鉄に覆われた銹化著しい、砂礫が付着した塊である。一端は幅28mmで他端は先細りになっており、鉄鏃か鉄銛が茎折れ状になり、またその先端(他端)部が折れて残存した様相を呈している。

メタルチェッカーによる検査では金属は残っていない。着磁力はやや強く重量は16.9g であった。

X線（放射線）透過写真では金属鉄が殆ど残っておらず、銹化前の鉄器の原形も識別できなかった。完全に銹化してしまっていると考えられる。したがって、メタルチェッカーによる検査結果とも照らし合わせ、組織観察や化学成分分析は取りやめた。

以上の結果を纏めると、金属鉄が完全に銹化してしまっており、鉄鏃か鉄銛かの判断はできなかった。

B　資料№２　鉄器片

長さ50mm、幅24mm、厚さ約２mmの銹化著しく水酸化鉄と粘土の瘤状固着物に覆われた資料である。外観写真のように中くびれの短冊形に見えるが鉄部は薄く、鉄斧の肉厚はない。大きな瘤が両面にあり、一部が乾燥のためか銹化進行中のためか、クラックが観察される。

メタルチェッカーによる検査では残存金属鉄が平担部に少量存在する。着磁力は強く重量は45.6g であった。

X線（放射線）透過写真は図版Ⅲ－８に示した。検討用の資料は写真右側の部分から採取した。その状況を図版　－　に示した。白く光っている箇所が金属である。

金属鉄の化学成分分析の結果では、珪素（Ｓｉ）やマンガン（Mn）など他の元素の含有量も少なく純鉄と言える。また、通常砂鉄に多く含まれる鉄中の不純物として移行していくチタニウム（Ti）やバナジウム（V）の量はともに0.001％と非常に少ない。一般的に鉄原料が鉱石の場合に多く含まれるとされる銅（Cu）、ニッケル（Ni）や燐（P）の含有量もそれぞれ0.001％と非常に低い値を示している。この鉄は極めて清浄な鉄であり、これらの数値のみでは鉄源が砂鉄か鉱石由来のものかは判断できない。

図版Ⅲ－10に金属試料面の20倍の顕微鏡写真を示した。Ｌ方向、Ｃ方向ともこの倍率では介在物（不純物で主として精錬時の鉄滓）が識別できない。図版　－　に100倍の400倍で撮影した金属組織写真を示した。写真で特に灰色に見える部分が介在物であるが、Ｌ方向Ｃ方向ともに強く延伸されていないので、鍛冶加工の程度は少ないと認められる。図版　－　はナイタール液でエッチングした同倍率の写真であるが、金属面の結晶粒子は細かく粒度が揃っている。写真の白い部分はフェライト（純鉄）、黒く見える粒子はパーライト〔フェライトと黒いセメンタイト（炭化鉄）が交互に層状になった〕の組織となっている。写真の上でパーライトの量を見ると鉄に含まれる炭素量は0.4～0.6％程度と推定される。

ＥＰＭＡによる金属面の観察結果を図版　－　から　に示した。ＳＥ（走査電子顕微鏡写真）像で黒色の部分が介在物で灰白色の部分が金属鉄である。介在物はSi、アルミニウム（Al）、カルシウム（Ca）やマグネシウム（Mg）と鉄（Fe）の酸化化合物から構成されている。化学成分分析で述べた砂鉄由来の成分であるTiとV、鉱石由来のCu、NiやＰは存在していない。

以上の結果を総合するとこの資料は、

① 金属鉄が残存するものの鉄器であるかいなかあきらかではない。（資料の性格は鉄製品と表示）

② 金属鉄は炭素を0.4～0.6％程度含有しているが、非常に純度の高い鉄（鋼）と言える。

③ 軽い鍛冶（鍛造）加工が施されている。

④ 鉄源が砂鉄か鉱石かは明らかにならなかった。

化学成分分析結果　　単位：％（ｍ／ｍ）

成　分	C	Ｓｉ	Ｍｎ	Ｐ	Ｓ	Ｖ	Ｃｕ	Ｃａ	Ｍｇ	Ａｌ	Ｎｉ	Ｔｉ	Ｃｒ	Ｆｅ
試料２	＊	0.021	0.001	0.001	＊0.001		0.001	0.012	0.008	0.001	0.001	0.001	0.001	残

＊：試料少量の為、分析不可

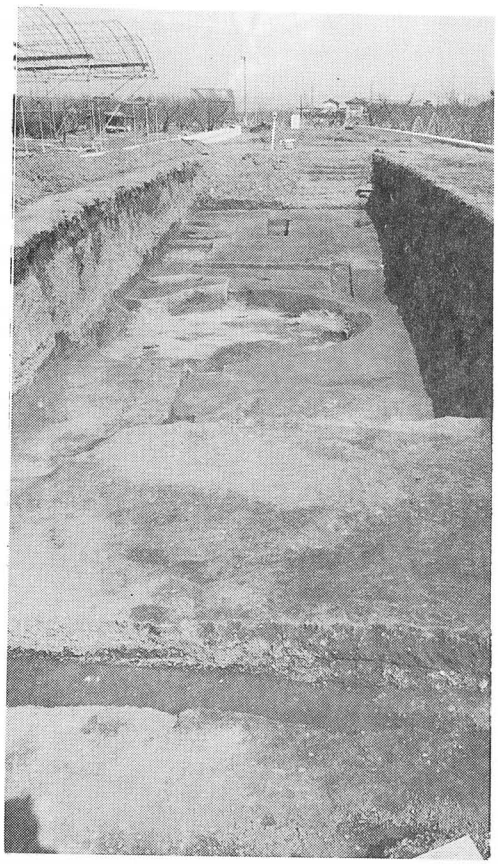
【分析方法】　鉄滓等の分析方法はＪＩＳ法に準拠し、以下の方法とした。

Ｃ　Ｓ　　：燃焼－赤外線吸収法

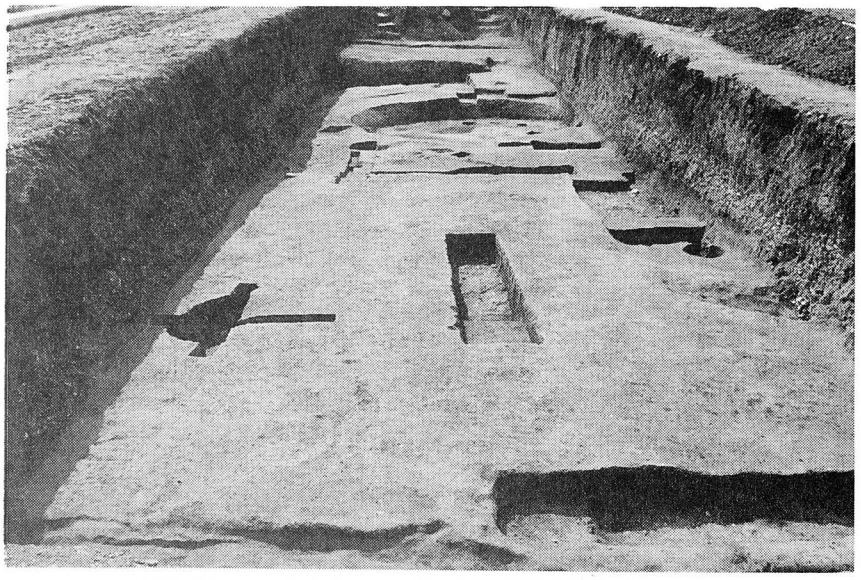
Ca、Mg　　：原子吸光法

Si、Mn、P、V、Cu、Al、Ni、Ti、Cr：ＩＣＰ発光分光分析法

図版 I

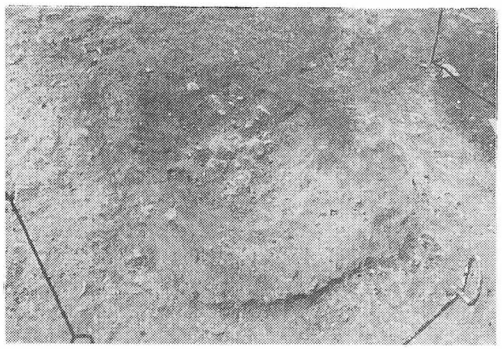


1、赤面C遺跡全景（西方向より）



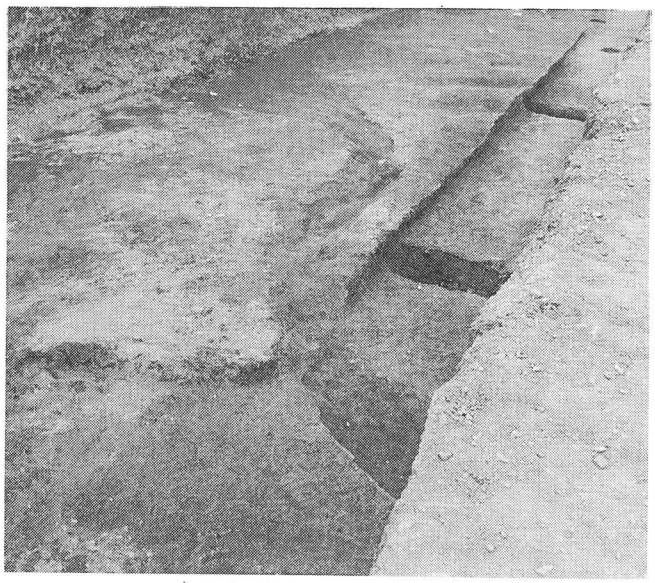
2、　同　（東方向より）

3、赤面C遺跡1号住居址全景

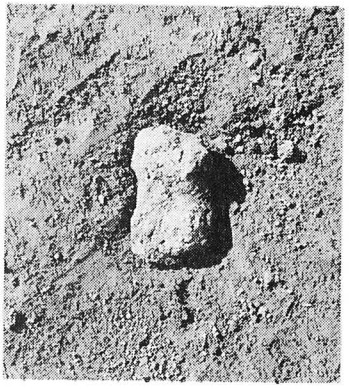


4、　同　炉

5、　同　遺物出土状況

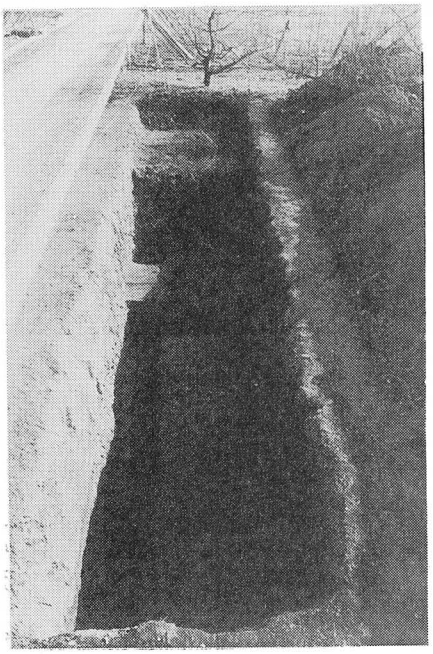


6、赤面C遺跡1号溝遺構及び鉄製品出土位置

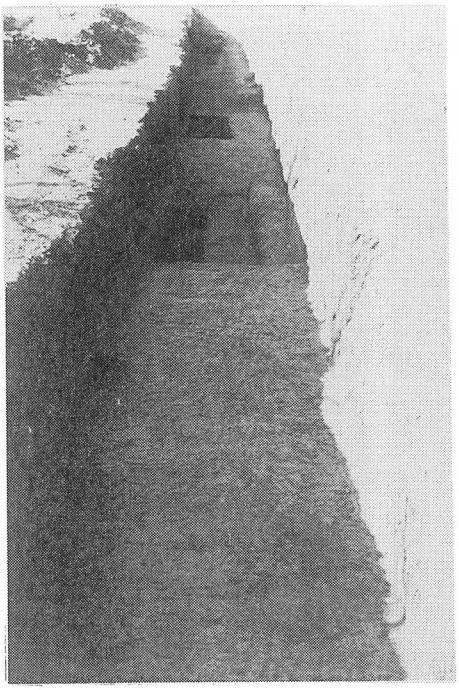


7、赤面C遺跡鉄製品出土状況

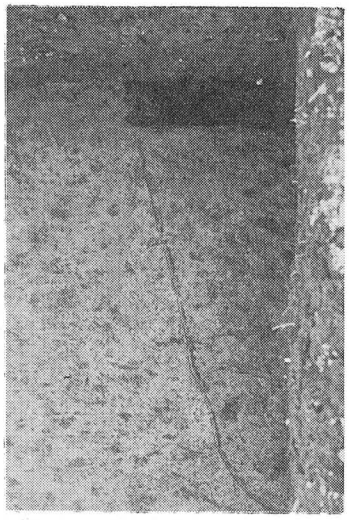
図版 Ⅱ



1、枇杷Ｂ遺跡 第１トレンチ



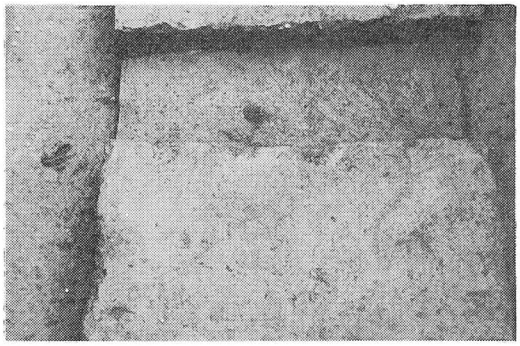
2、同　第２トレンチ



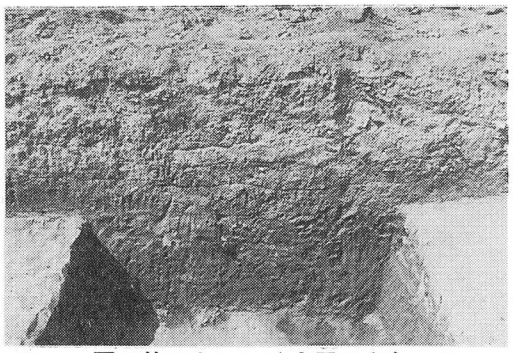
3、枇杷Ｂ遺跡第２トレンチ
東端落込み

4、枇杷Ｂ遺跡第１トレンチ焼土溜まり

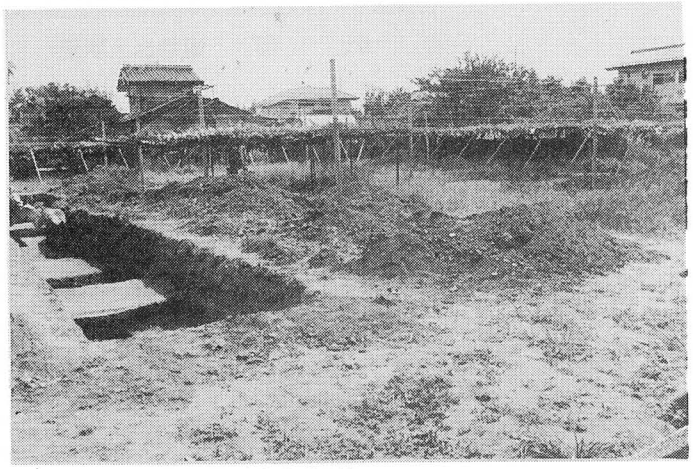
7、　同　　第１トレンチ



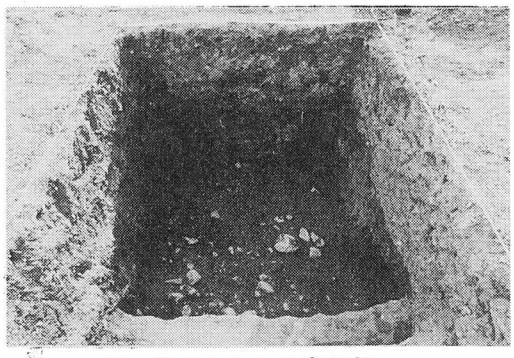
5.　　同　　中央落込み



8、　同　第１トレンチ土層セクション

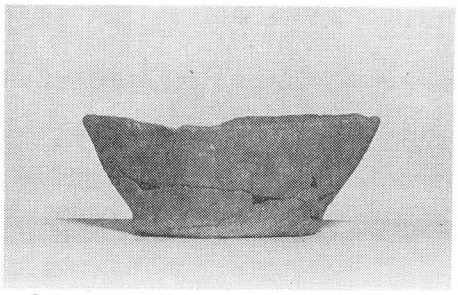


6、藤塚遺跡全景（北東より）

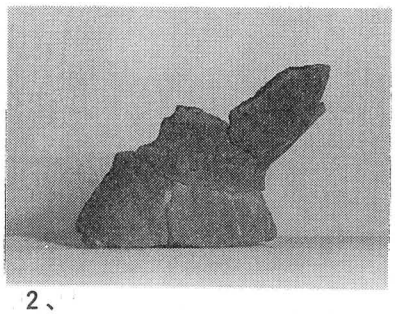


9、　同　第２トレンチ東端部

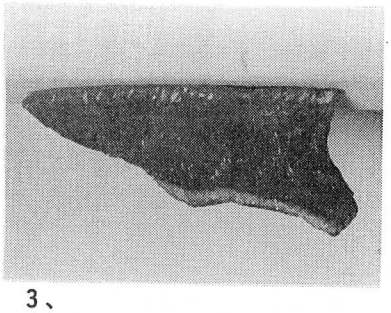
図版 Ⅲ



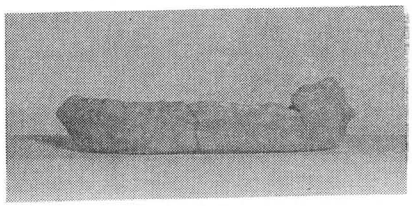
1、



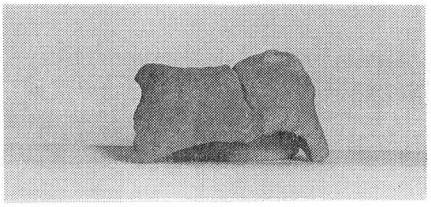
2、



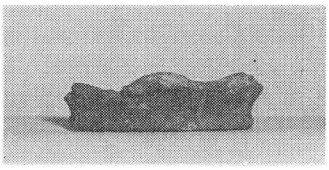
3、



4、

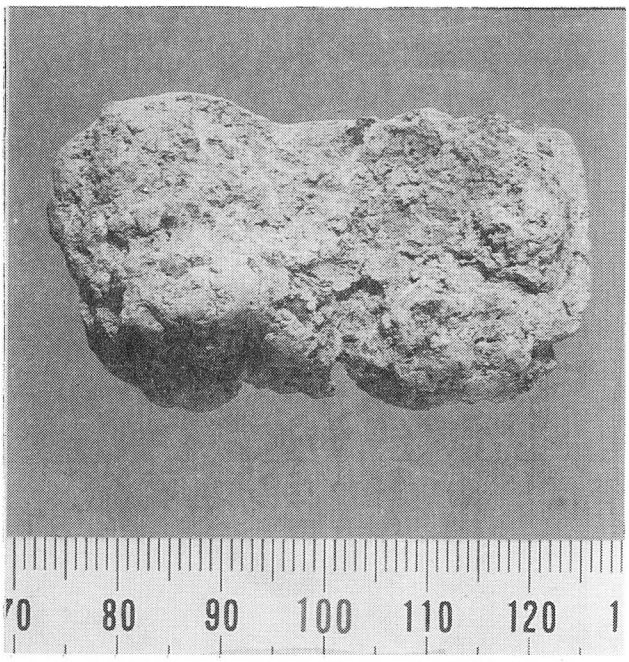


5、

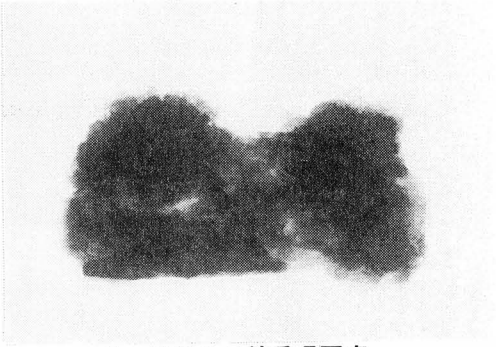


6、

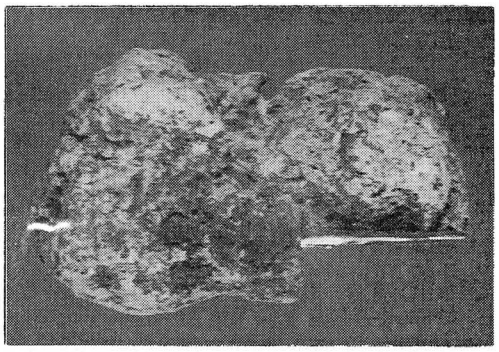
赤面Ｃ遺跡１号住居地出土土器（１～６）



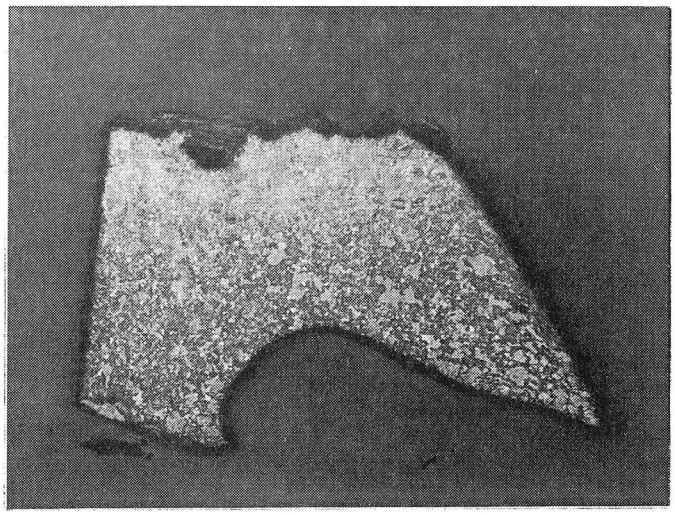
7、鉄製品外観写真



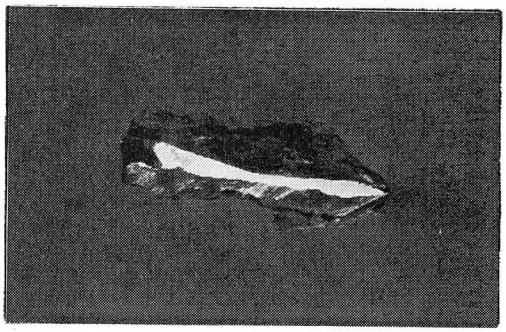
8、鉄製品Ｘ線透過写真



9、鉄製品切断状況写真

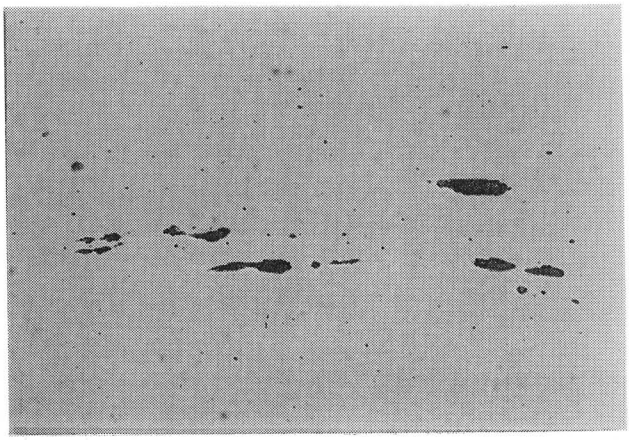


11、鉄製品顕微鏡写真（Ｌ方向×20）

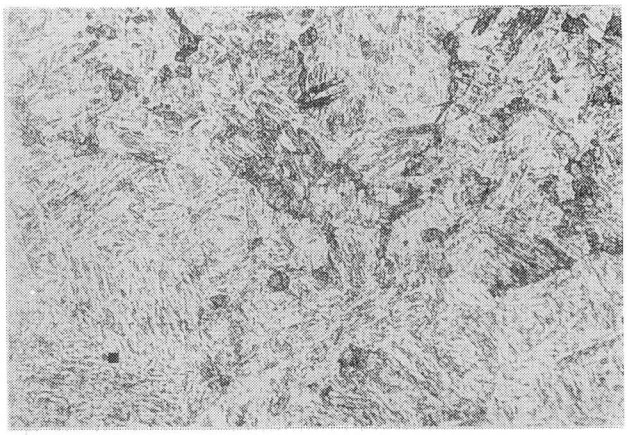


10、鉄製品切断（試料部分写真）

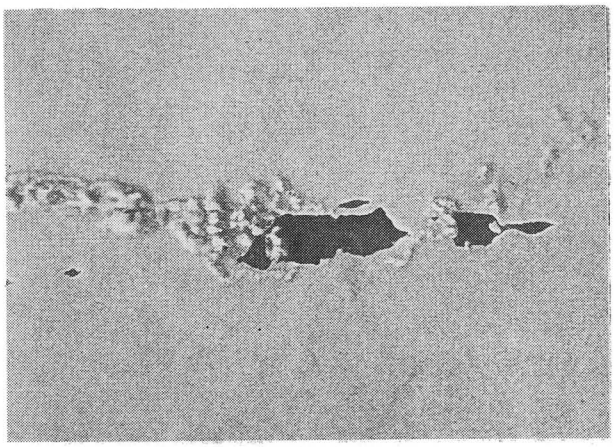
図版Ⅳ



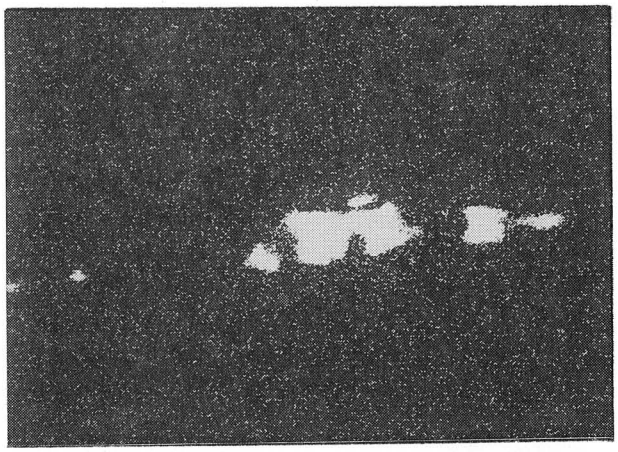
1、鉄製品顕微鏡組織写真（Ｌ方向×400）



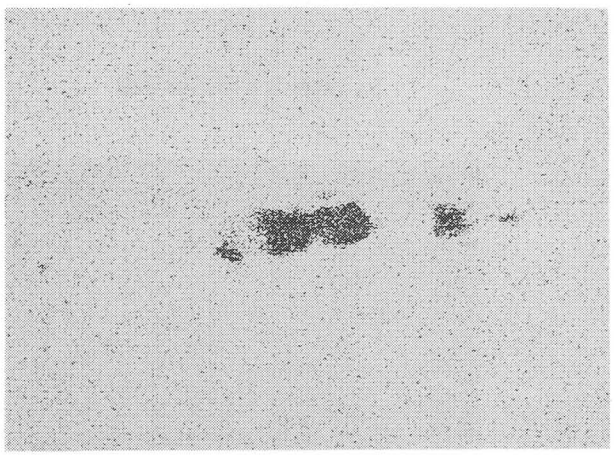
2、　同　（エッチング処理後Ｌ方向×400）



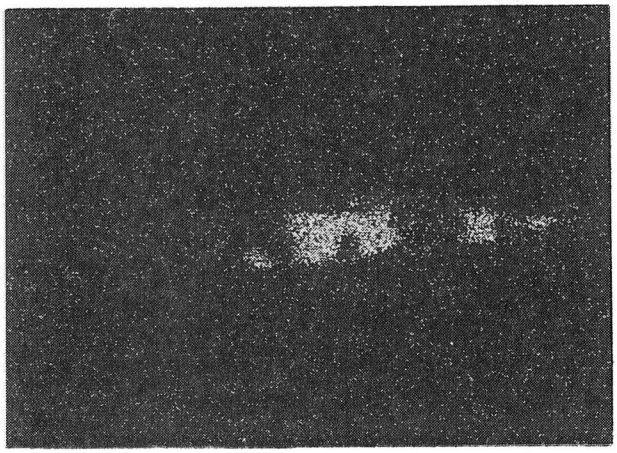
3、走査顕微鏡写真（Ｌ方向×400）



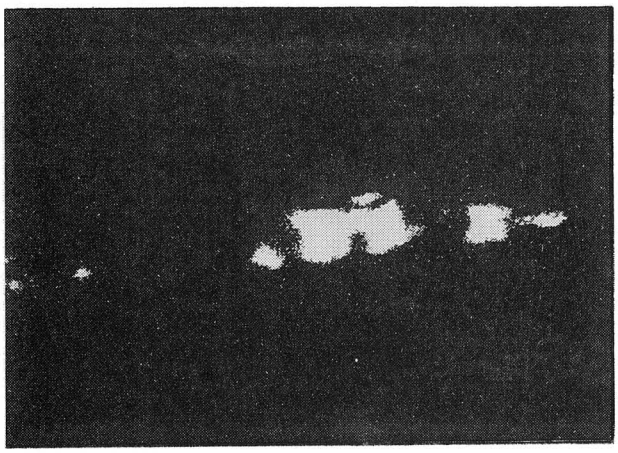
6、　同　（Ｃａ×400）



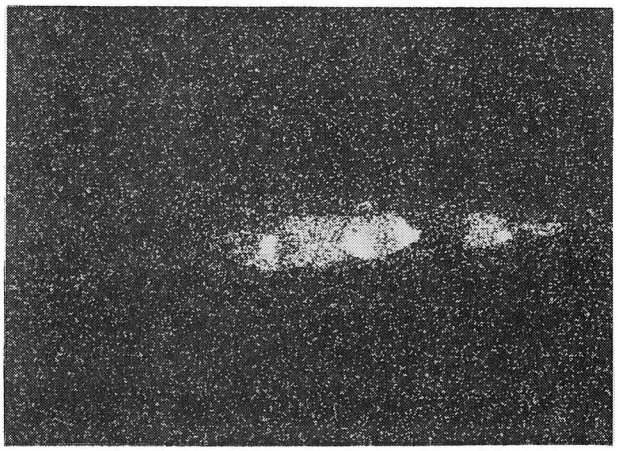
4、ＥＰＭＡ観察写真（Ｆｅ×400）



7、　同　（Ｍｇ×400）



5、　同　（Ｓｉ×400）



8、　同　（Ａｌ×400）

報告書抄録

ふりがな	ちょうないいせきしくつちょうさほうこく		
書名	町内遺跡試掘調査報告		
副書名	ケア・ハウス建設に伴う藤塚遺跡試掘調査他		
シリーズ名	櫛形町文化財調査報告	シリーズ番号	No. 16
編著者名	清水　博		
発行者	櫛形町教育委員会		
編集機関	櫛形町教育委員会		
所在地	〒400-03　山梨県中巨摩郡櫛形町小笠原397－1　TEL　0552-82-0108		
発行年月日	1997年3月31日		

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	遺跡番号	北緯	東経	調査機関	調査面積 ㎡	調査原因
赤面C遺跡	山梨県中巨摩郡 櫛形町沢登字赤面	193909	13	35度 37分 16秒	138度 28分 31秒	19960404 ～ 19960426	200	町道11号線建設に伴う試掘調査
藤塚遺跡	山梨県中巨摩郡 櫛形町小笠原字藤塚	193909	67	35度 36分 48秒	138度 27分 55秒	19960812 ～ 19960825	70	ケア・ハウス建設に伴う試掘調査
枇杷B遺跡	山梨県中巨摩郡 櫛形町小笠原字枇杷	193909	243	35度 36分 30秒	138度 27分 55秒	19961215 ～ 19961228	150	工場移転に伴う試掘調査

ふりがな 所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
赤面C遺跡	(集落)	弥生期終末	住居址、土壙、溝状遺構	弥生式土器	
藤塚遺跡		弥生		土器	
枇杷B遺跡	(集落)	古墳初頭	(住居址)	土器	

櫛形町文化財調査報告　No.—16

町内遺跡試掘調査報告Ⅱ

山梨県中巨摩郡櫛形町町内遺跡試掘調査報告書
１９９７年　３月２０日　印刷
１９９７年　３月３０日　発行
編集・発行　櫛形町教育委員会
山梨県中巨摩郡櫛形町小笠原397-1
印　刷　野　中　印　刷
山梨県中巨摩郡櫛形町小笠原